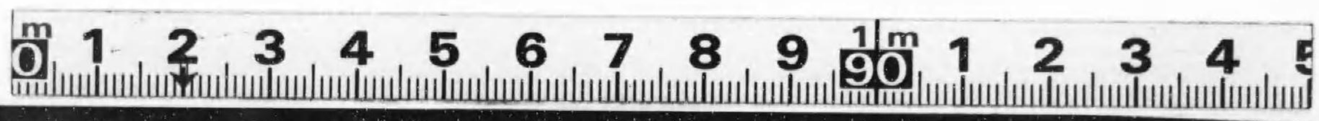
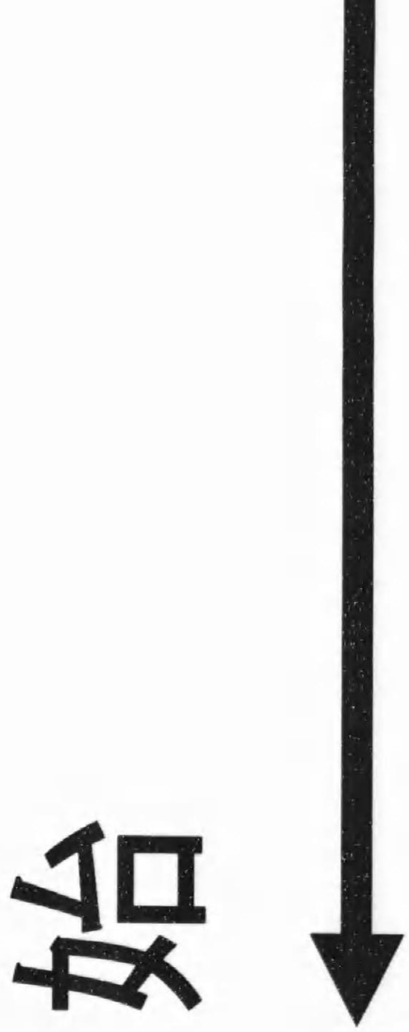
385
184





特216
618

帝國圖書館藏

片桐龍子著

久遠の愛

忠誠婦德會發行

昭和十三年 帝國圖書館

著　　者

殿光陽丘ケ光陽

久遠の愛目次

秋空晴れて……九
女性の友情……一一
やさしき友愛……一二
めぐりあひ……一六
縁談……二四
結婚……三三
松の緑……三六
親愛の情……三九
兄の苦境……四二

里の一夜……四七
夫の情……五二
妹の心……五八
歌留多會……六七
片思ひ……七四
猜疑心……八二
針を包んで……八六
母の懷……八九
月に叢雲……九五
悲憤の涙……一〇五
復縁……一二五
密談……一三二

壁に耳……一三七
心の刄……一四五
傷心……一五二
主從の情……一六一
涙をのんで……一七〇
ちいやの心……一七五
斷腸……一八三
身のやつれ……一九〇
仇夢……一九五
遺書……一九八
月光を浴びて……二〇四
心の闇……二〇七

運命の惡戯……二一一
空蟬……二一五
眞意を知る日……二一七
母は强し……二二七
夫の形見……二三一
幼な心……二三四
智德の芽生え……二三九
母ごゝろ……二四一
病魔に冒されて……二四七
幼なき孝心……二五二
神の導き……二六二
父と子……二六七

病める妻……二七二
父と子……二七七
父の家……二八九
祖母と孫……二九一
幾代の懺悔……二九九
毒舌……三〇六
聖き心……三一二
歪める心……三二一
波打つ孤島……三二八
固き決意を秘めて……三三七
妻子よいづこ……三四五
父へ夫へ……三四九

心の闇に閉ざされて……三六〇
學生運轉手……三六五
正しき報ひ……三六九
寶玉……三七五
親心……三八六
敎への庭……三九三
大和撫子……四〇二
福德の光……四〇五
總てを委されて……四一二
直き心……四一九
箱根の禍……四二三
眞心こめて……四二七

母性愛……四三二
喜びの朝……四四二
歐米崇拜者……四四六
紅薔薇……四五七
愛娘のために……四五九
强き意志……四六六
懷しき故鄕……四七三
波路越えて……四八二
兄の遺產……四八九
妙法の世界……四九三
焦瘁の父……四九四
因果は巡る……五〇〇

悲壯な決意……五一七
妻子の願ひ……五三〇
廻る春……五二七
筆を擱くに當りて……五三〇

序文

聖代の御稜威は當に全世界に宣揚され、國威赫々として輝く我が日本は、今や地球上に於て、東亞に位する一小島國ではありません。

極東黄色民族の盟主として、創世以來天から與へられた、一大使命を遂行すべき時世に遭遇致しましたゝめに、皇軍は支那大陸に軍馬を進めて、聖戰に邁進して、數千年來極東の天地に集結して、民族の福祉を禍し、圓滿幸福なる生命の發達を、障碍致して居りました、妖雲を打拂ひ、天地を清め、過去に於ける一切の矛盾不自然を自然眞理の狀態に改め、將來永遠不滅なる人類生物の幸福の根幹を培ふために、御稜威の輝きは遺憾なく發揮されて居ります。

無知蒙昧にして、自國を知るの心力に乏しき、支那の指導的地位に、立つ人々の、

歐米依存の觀念を利用して、あらゆる知能力を應用して、東洋に權益を得るのみか、進んでは領土も自國の主權に收めんと、機を窺ふ歐米各國を、我より遙かに優れたる、文明國優秀民族と信じて敬仰したのは、支那の國民のみでなく、我が日本國民の中にも、日常の衣食住迄、總て歐米を模倣する事を以て、優れたる自覺したる日本人であると、思ひ過つて、歐米の風俗を見習ひ、世界無比にして、絶對的に尊い古來日本に傳つて參りました、純眞にして高尚優美な、美風良俗を忘れて、之を行はず、全く日本國民として、殊に女性としての、德を失つてゐる婦人が、最近澤山現はれて參りました。

是等は地位財產のあるのを幸ひ、遠く歐米に學び、歐米思想風俗に染つて、歸國した者が、そのまゝ自己の生活を歐米風に生きようとする言語態度行爲など生活の矛盾から一般國內の民衆に及ぼす影響と、書籍映畫日用品等の、歐米からの輸入品に依つて、受くる影響に依りまして、知らず〳〵の間に歐米の思想風俗を取入れて、身分の高きも、低きも、富める人も貧しき人も、皆浮華輕佻な風俗に變つて參りましたのは、

開港以來數十年間に涉つての事でございました。

然るに地上に於ける交通文化の發達が盛になる程、一層その矛盾せる外來思想風俗が、侵入しますために、日本の家庭社會の純風良俗は、次第に破壞され、國家の體面を損ふ樣な醜態を演ずる人々さえ此處彼處に現はれて參りました。

例を上ぐれば、數限りなき事でございますが、最も驚くべき事は、教養あり資產あり特殊な地位名譽を持つ家庭の主婦及び令孃にして、周圍の人々から、最も崇敬の的となり、日本婦人としての龜鑑たるべき地位に置かれてゐる人々が、我が身の義務責任を忘れて、交際に名を藉りて、ダンスホール等に足を入れ、異性と肩を竝べ、腕を組んで踊り狂ふといふ狂態を演じて、些かも省みる所なきのみか、それを以て最も高尚なる代表的日本婦人なりと思ひ、家庭を圓滿に幸福に治むる事の、何如に重大であるかを省みる事さへない婦人の、多くなりました事は、誠に慨嘆に耐えない事でございました。

それがために、一般社會にも、この間違つた風俗が、充滿して參りまして、當に古

來の日本婦人道德が、滅びるのではないかとさへ思はれます。

それは何故かと申しますと、婦人が家庭を外にして、社會に活動するといふ事も、時代の趨勢上止むを得ないとは申し乍ら、天來の個性を忘れて、濫りに男女同權論を叫んで、女性としての使命を忘れる樣な奇怪な婦人が澤山現れて參りました。

歐米は何れかと申しますと、男子が謙遜して、女性を尊重するといふ樣な風俗が昔からございます。

これがために米國邊りでは、婦人のゐる場所では、男子は煙草も遠慮し、帽子を脫ぎ毅然として襟を正して敬意を表するのであります。

それに反して女性は男子の前でも帽子も脫がず、氣儘な行をして、少しも遠慮する事はないさうであります。

この變態的な風俗を見て、これが當然の樣に馴れ信じた日本の女性は、歸國すると直ちに自身も我が家庭に、又男性に向つて、この風俗を應用しやうと致しますので、其處に矛盾を生じ、家庭の不和を招き、感情を害し、收拾する事の出來ない樣な不幸

を招來致します。

外國は昔から、個人主義又、物質萬能主義でございますから、多くの場合外の人の事情を察して、自身が感情を殺して、相手に幸福を讓るといふ樣な事は殆どありません。

祖父母は祖父母、親は親、子は子といふ風に、同じ家庭であつても、別々に考へてゐますから、來客があつた時でも、その家族のために、土產を贈り、家族からお禮の言葉を受け、一家族擧つて客をもてなすといふ樣な事は、殆どなく、格別の場合でない外は別々に扱つて居りまして、我に受けたる贈物でない限り、決してお禮は言はない、又受けた者も、家族に分けるといふ樣な事はありません。

結婚にしても、妻と夫の財產は別々で、決して協力といふ事はありません。

何事に依らず、總て金が解決致しますために、外國は一も金、二も金、三も金といふ全くの物質萬能主義でございます。

然るに日本は是と反對で、遠い祖先から、純眞な淸らかな大和魂と、淸淨な生命

を受けついで參まして、日の本の御代は、天照皇大神様から始まり天孫様が、代々天つ日嗣を御繼承遊ばされ、現人神様としての御稜威に輝き給ひて、皇室の御尊嚴は、天の御柱でございました、その尊き御柱から、枝葉として榮えたのが、地方の氏神様でありますために、國民は皆祖先に溯つて行けば、皇室の御稜威となり、又大神様の御光りの中に還るのであります。

かゝる神秘不可思議にして尊い天祖様の生み治め給ふ、尊い國でありますから、國民は常に大神様を、大祖として仰ぎ奉り、皇室を宗家として、尊び奉り、國民は魂も肉體も總て同胞として親んで參りましたので、その結團力は、大神様から天孫様へお授けになりました、三種の御神寶に滿たされて居ります、大和魂の力を以て、繋つて居ります。

ために家庭を營む場合でも、親子子孫は縱の鎖にして、夫婦は天祖様の御聖意に依りて、緣を結び給へる、横の繋りとし一心同體の生命として、誠に力强く圓滿に家庭及び夫婦生活は行はれて參りました。

殊に日本では、男子は陽性にして、表面に立つて、生活の原動力を負擔し、女子は陰にして家庭にあつて、濃まやかな愛情と、深い慈悲情と、固き犧牲心と、忍耐力とを以て、子女の教育、家庭の營みの萬事に當つて、常に夫を內助し、父母に孝養を盡し、子孫に善良なる教育を施し、間接に國家社會のために、捧げ盡す、之を以て、日本婦人の德性とし、誇りとして參りました。

創世以來日本婦人に、この獨特なる特性があつたればこそ、今日の日本を築き上げて來たのでございます。

若し今日の日本婦人が徒らに歐米風俗に染つて、この傳統的純眞な德性を失ひましたならば、遂に我が國は、滅亡の運命に陷る外はありません。

然るに今日突如として、起りました、支那事變を動機として、長い間の歐米崇拜禮讃の迷夢から覺めて、敢然として我が國體の本義に目覺め、誤れる歐米禮讃主義思想風俗を改めると共に、純眞な日本人として、殊に日本婦人としての德性に歸らしめるために、政府では樣々の尊い御教訓や、御指導を行はれます事は、誠に喜ばしき限り

でございます。

之卽ち　天の御心に依る事で、明治天皇の御製に

善きを取りあしきを捨てゝ外國に

おとらぬ國となすよしもがな

の尊い御聖訓を垂れさせ給ふた事が、今正しく國民の魂に成就されつゝある事を思ひますと、唯恐懼に堪えません。

著者は淺學無能者でございますが、君國の現狀に鑑みまして、多年理想的日本婦人として、夢の中に描き出しました、婦人の德行を土臺と致しまして、眞實の日本婦人、日本國民の母を描き出しましたのが本書でございます。

幸ひにして、本書を御愛讀下さいます會員にして、將來の日本婦人として、全き使命を果されます、よき資料となり、鑑として學んで頂けますならば、著者の喜びこれに過ぎるものはございません。

昭和十三年輝く春

著者記す

久遠の愛

秋空晴れて

秋空高く晴れ渡つた午後、町の南部にある中學の門から、元氣潑溂とした學生が、群がる樣に自轉車又徒歩で出て來ます。

その中の四人ばかりの最上級生らしい學生が、五六町自轉町で走つた頃、一番前にゐた一人が後振返つて、

「おい、女學校の運動會を見て行かうか。」

と笑つて言ひました。すると、

「女學校の運動會なんか見たつて、仕方がないよ。」

「さうでもないよ。却々面白いぞ。」
「君見た事があるかい。」
「うむ、去年一寸見た。競技なんかは、大して面白くないが、女學生の遊戯はとても優美でいゝぞ。今頃から後が丁度いゝのがあるんだよ。」
「牧村おい、君どうする。見て行くか。」
「行つてもいゝが……。」
三人は自轉車から下りました。そして少し遲れて走つて來た藤村敏郎に、
「藤村、女學校の運動會を見て行かうよ。今相談してみんな行く事にしたんだから。」
敏郎は笑つて、自轉車から下り乍ら、
「女學校の運動會？　そんなの見たつて仕方がないじやないか。」
「そんな事言はないで、一寸行つて見て來やう。」
「しかし女學校の運動會に、中學生なんかゞ行くのは、變じやないか。」
「變なものか。みんな澤山行つてるよ。

商業も農林もみんな押しかけて行つてゐるよ。」
「かまふもんか。行かう〳〵。」
四人は大街道から、半町程引込んでゐる、女學校の中へ入つて行きました。

女性の友情

來て見ると、流石に廣い運動場の周圍も、觀覽者で、黒山の樣に、十重二十重に取圍まれて、中では今二年生の百米競走の最中で、觀覽者は夢中になつて、各々知合の女學生の名を呼びつゝ、應援してゐます。
生徒達も夢中になつて、
「山田さんしつかり!!」
「吉田さん頑張つて!!」

などゝ力を入れて叫んでゐます。

四人は成るべく人の少い方へ廻つて、見よい位地に立つて、興味深氣に、この競走を見てゐました。

今しもスタートを切つて、駈け出した八人程の一組が、驚く程の迅さで、群衆の前を駈け過ぎました。群衆はわつと鬨の聲を上げて、聲援しました。

と決勝點へ入らうとする間際、どちらが先かと參觀人が手に汗握つて見凝めてゐた先頭の一人が、何に躓いてか、見るも哀れに轉びました。

これを見ると觀衆は、わつとどよめきました。轉んだ生徒はひどく何處かを打ちでもしたものか、すぐに起上らうとはしません。

やさしき友愛

この時決勝點に迄近づいてゐた第一着と見られた女學生は、我を忘れて駈け戻り、倒れた友に近づいて、

「萩野さん、どうしたの？　怪我をなすつたんじやありませんか。」

と親切に抱き起さうとしましたが、何を認めたのか急いでハンカチを取出して友に渡しました。

見ると萩野と呼ばれた女學生は膝頭から、血を流してゐます。

「惡かつたわね。早くあちらへ行きませう。そして救護室でお手當して頂きませう。」

萩野絹子は恥づかしさと痛さのために、顔を眞赤にして、俯向き乍ら、

「すみません。」

「貴女、大丈夫？　歩けますか。私が負ぶつて行つて上げませうか。」

「大丈夫ですわ。立てますわ。有りがたう。」

「では肩へかけて上げませうね。」

二人は急いで觀覽者の間を通つて、出て行かうとしました。

「私きまりが惡いわ。轉んだりして……。」

「かまふものですか。過ちですもの。みんな同情してこそゐますが、笑つてゐる人なんて、一人もありません。心配しなくつてもいゝのよ。」
と言つて慰め乍ら、今入つて來た中學生のゐる邊が一番空いてゐたので、
「恐れ入りますが、少々御免下さいませ。」
と左右に道を開けて貰つて、傷ついた友を劬つて救護所の方へ急いで行くのでした。
その女學生の樣子を見ると、誰もが感激して、
「親切に、よく世話をして上げる、落着いたいゝ娘さんだ。」
「本當にさうです。自分の事を忘れて、あんなに友達を親切にするなんて、却々出來ないものですが、よく出來たお孃さんです。」
「それにあの美しい綴縹はどうですか。本當に可愛いゝ顏をしてゐらつしやいますね。」
「何處の娘さんでせうか。」
人々は後姿を見送つて、口々に噂してゐました。
敏郎もこの多くの人々の噂を耳にし乍ら、我を忘れて、その女學生の姿が見えなく

なる迄ぢつと見送つてゐました。そして心の中で、
「尊い犧牲心　強い友情、女らしい女性、あゝいふのが本當の淑女、純眞な日本女性といふのだらう。」
と感嘆したのでした。
しかし美しい心も、姿もはつきり見て取つたけれど、肝腎の何處の誰人の娘とも知る由もなく、男子として殊に學生として、進んで調べる事も出來ないで、そのまゝ友と連れ立つて歸りました。
その道すがら、
「今日女學生が景氣よく轉んだ恰好と言つたら、實に素晴らしい餘興だつたなあ。」
「しかし可哀さうだつたよ。それに君は邊りもかまはず、大聲出して笑ふもんだから、僕等きまりが惡かつたぜ。」
こんな他愛もない噂をして、面白がつて歸りましたが、敏郎は全く別な心持で、自己が決勝點へ入る事も忘れて、友の身を案じて、引返して卽座に助け起して、劬り救

護所へ伴れて行つた、優しい女學生の面影が、いつまでも胸の中に浮んで來て、一種の尊さと懷しさといふ樣な感に胸を打たれました。

めぐりあひ

この時から五年經つた春、敏郎は東京の大學を卒業し、幹部候補生として、軍隊に入つて、野外演習のために、山間部へ行軍に參りまして、月ヶ瀨村へ入りました。

そして演習がすんでからその村の小學校の校庭で、晝食を攝る事になりました。

校庭には美しい白梅紅梅が、蕾を綻ばせ咲き初めて、えも言はれぬ芳香を漂はせてゐます。

激しい演習に、疲勞した軍人達は、額に滲んだ汗を拭き乍ら、暫しの時間を、清淨な零圍氣に包まれて樂んでゐます。

この一隊を喜ばせたのは、校庭に薫る、紅梅白梅だけでなく、村の青年や處女會員が、今日演習に來る軍隊を饗應するために、朝早くから集つて、湯茶の世話をするのみか、處女會員は、昨日から準備して、眞心こめたお萩などを作つてもてなしたのでした。

爲に將兵一同は、その純眞な眞心を限りなく喜んで受けました。

優しく兵をもてなしてゐる、純眞な處女會員の中に、敏郎は思ひがけない人を見付けました。そして

「あゝ　確かにあの人だ。」

と呟きました。と隣に休んでゐた戰友は問ひました。

「何を見付けたのだ。」

「何、何でもないんだよ。」

と敏郎は何氣なく打消しましたが、間もなくその處女會員は、お茶を持つて、敏郎の前に來ました。そして微笑み乍ら、

「どうぞお上り下さいませ。」
敏郎は慌てゝ姿勢を正し、
「やあ　有りがたう。恐れ入ります。では頂きます。」
と言つて、お茶を取りました。
とその時その娘は、慌てゝ、
「あら？　お茶殻が隨分澤山入つて居りますわ。一寸取換へて參ります。」
「いや、かまひません。結構ですよ。」
「でも餘り失禮でございますから……。」
その人は無理に敏郎の手から、茶碗を取つて空けると、新しく熱いお茶の入った罐を持つて來て、靜かにお茶を注いで差出しました。
敏郎はその身のこなし、手振り等を、じつと見凝めてゐましたが、その娘が敏郎の前を去つて外へ行かうとした時、思ひ切つて聲をかけました。
「こんな事を伺つては失禮ですが、貴女は小縣の高等女學校を御卒業ではございませ

んか。」
とその娘はにつこり笑つて、
「はい、左様でございます。」
「ではお伺ひ致しますが、確かに五年前だつたと思ひますが、運動會の日に百米の競走に、過つて運動場で倒れて、怪我をしたお友達を助けて、救護所へお伴れになつたのは、貴女じやございませんでしたか。」
「まあ、どうしてそんな事を御存じでゐらつしやいますの？
さう仰有ると、私思ひ出しました。その時友達の萩野さんといふ方を、起して救護所へお伴れした事がありました。」
「さうでしたか、矢張り貴女でしたか。」
と感慨深さうに言ひ乍ら、敏郎はその顏をじつと見凝めました。
「どうしてそんな、昔の事を御存じでございますの？」
「實はその時、僕は中學に行つてゐましたので、學校の歸途友達に誘はれて、一寸女

學校の運動會を覗きに行つたのです。その時に百米の競走で、怪我をされたお友達を助けて、救護所へおつれになるのを見たのです。

その時貴女がお友達を肩にかけて、御免下さいと、僕達を左右に分けて通つて行かれたものですから、貴女の顏をよく覺えてゐます。」

「まあ、そんな事がございましたでせうか。

あの時は夢中でございましたから、そんな失禮な事を致しましたのでございませう。

それに年も小さくて、辨へもございませんでしたので、本當に申譯ございません。」

敏郎は笑つて、

「いや、貴女に、そんな御挨拶をして頂いては恐縮します。

でも不思議ですね。貴女の事をよく覺えてゐたんですから。」

「本當に恐れ入りました。私はそんな事全然憶えて居りませんでしたのに。」

「それはさうでせう。貴女の方にはてんで、僕を知つて頂く樣な動機がなかつたんですから、それで貴女は失禮ですが、この御近所の方ですか。」

と聞かれると娘は微笑んで、

「はい、私すぐこの道の上の家が私のうちでございますの。」

「あゝさうですか。では貴女の兄さんは篠原好雄君と仰有るんでせう。」

「はい、左樣でございます。よく御存じでございますのね。」

「青年會の幹部として、知られた方ですから、よく噂に聞いて知つてゐます。

しかしまだ一度もお目にかゝつた事はありません。」

「左樣でございますか。失禮でございますが、貴方樣は、このお近くの方でゐらつしやいますか。」

「僕は宮川町です。名前はかういふ者です。」

と名刺を出して渡すと、

「あら　藤村敏郎樣と仰有いますのでございますか。

軍隊へは、何時お入りになりましたのでせうか。」

「この正月に入つたばかりです。」

「まあ　さうでございますか。さぞお大變でございませうね。」
「馴れる迄は少し骨が折れますけれど、軍隊生活は馴れて見ると、樂しい愉快なものです。僅か一年しかゐられないんだから、殘念な樣な氣もしますよ。」
「幹部候補生ですと、期間は短くてゐらつしやいますさうで、それだけ御訓練が嚴しいと伺つてゐますけれど……。」
「さうですよ。平時は兎も角一旦緩急あれば幹部として、部下を指導する重要な任務があるのですから、在營中はしつかり訓練を受けなくちや、萬一の場合役に立ちませんからね。」
「全く仰有る通りでございますわね。男子のお方は、君國に對して、特別の尊い義務を持つてゐて頂くのですから、御苦勞樣でございます。」
「失禮ですが、貴女のお名前は何と仰有るのですか。」
「私　智惠子と申しますの。」
「智惠子さんですか。確かお年は二十歳におなりですね。」

「まあ、どうしてそんな事御存じでございますの？」
「だつて貴女、運動會の時が二年生だつたでせう。それから五年たつてゐますから二十歳におなりの譯ではありませんか。」
「ほほほゝゝゝ。恐れ入ります。年ばかり大きくなりましても、何もお役に立ちませんのでお恥しうございますわ。」
「いや今日は大變お世話になりまして有りがたう。みんな深く感謝してゐますよ。」
話はこれで終つて、智惠子は甲斐々々しく、あちらこちらと立廻つて、饗應に餘念がありません。
間もなく時間が來ると、軍隊は喇叭の音も勇ましく、青年團處女會の人々に見送られて、川岸に沿つてこの村を去つて行きました。

緣談

敏郎はその年の暮、目出度く少尉に任官すると、除隊して、懐しき母や妹の待つ我が家へ歸りました。年が改つて間もなく、母は、

「お前も早速嫁を迎へて貰はないと困ります。私も永い間樂んで待つてゐたのだから……」

「適當な人があれば、貰つてもいゝのですがね。」

と敏郎はこだはりなく答へました。

「敏郎、それについては春から平井の叔父様や町長の岩砂さんや市會議員の林さんが、色々と心配して下さつて、五六人候補者を探しておいて下さつたんですよ。

それで私も色々考へて、よく身許も調べて、これならと思ふ人を、三人ほど心掛けておいたから、一度寫眞を見て御覽。

氣に入つたら、直接見合ひする事にすればいゝんだから。」

と言つて、美しい若い娘の寫眞を出して來て、敏郎に見せました。

敏郎は母への手前、一應は手に取つて見ましたが、丁寧に重ねて下に置くと、

「お母さん、貴女月ヶ瀬村に、篠原好雄といふ人がある事を、御存じありませんか。」

「月ヶ瀬村の篠原さんと言ふと、小學校の眞向ひの、道上にある立派な構えの家じやないかえ。」

「さうです。その篠原さんの事です。」

「それなら今の跡取りは、何といふ名前か知らないが、お父さんの恭平といふ人は、大した義俠心の強い人で、よく名前の通つた人だから、私等も子供の時からよく知つてゐるんだが……。

今でも相當にやつてゐられるのか知ら？」

「今でも立派にやつてますよ。

お母さん、僕この春演習に行つた時、月ケ瀬の小學校の庭で休息して、晝食したので、あの家の人達にも大變お世話になりました。

家の樣子もはつきり見て來ました。」

「それがどうかしたのかえ。」

「あすこに智惠子と言つて、今年明けて二十一になる娘があるんです。

小縣の女學校も卒業してゐるし、却々しつかりした人だから、あんな人なら來て貰つてもいゝと、僕は思つてゐるんですがね。」

とかい摘んで、智惠子を知つた動機を、母に卒直に語りますと、母は眼を瞠つて、

「さうかえ。そんないゝ娘があすこにあるのかね。

今はどんな事になつてゐるのか、篠原さんの所の財政狀態は知らぬが、家屋敷は元通り立派でも、財產は大して持つてゐられないと思ふのだがね。」

「何故ですか。お母さん。」

「何故には、お前は若いから、詳しい事は知らないでせうが、先代の恭平さんといふのは、性質が男俠と言つた樣な、氣の大きな人だつたから、村の人からは旦那樣旦那樣と立てられて、えらい人氣の高い人だつた。

財產もあの村一番で、その當時二十萬以上も持つてゐたといふんだが、一時はそれをすつかり失つて、素裸になつた事があるんだよ。」

「何をやつたんですか。」

「今から三十年位前で、お前がまだ生れない先の事だが、確か六月だつたと思ふが怖ろしい大水が出て、月ケ瀬村の下の村は、家も畑も田も全部流され、人迄澤山流された事があるのだよ。

そのために三十戸ばかりは、田畑を失ひ、家を失つて、村に居ても生活が出來ないといふので、お上のお世話で、北海道へ移住する事になつたのです。

この話が始まると恭平さんは、非常に同情して、荒れた故郷を去つて、北海道へ行くなんて餘り氣の毒だから、何とかしてこの土地に踏止つて暮しを立てる道を開いて貰ひ度いものだと言つて、一生懸命で奔走しだけれど、どうにもいゝ工夫が浮ばない

ので遂に自分の財産を大半賣つて、流れた耕地を復興するやら、三十町餘りの野を買込んで、之を開墾させるやらして、兎も角二十戸餘りの人が生活して行くだけの耕地を切開いたのだ。

それでその當時は、救はれた人は言ふ迄もなく、近郷近在の人迄、神様の様に言つて賞め立てたのだ。

所がこんな大袈裟な仕事をすると、人のためにはなつても、却々大變な金がかゝるものだから、賣つた身代位では間に合はず、お終ひには、家屋敷迄銀行へ抵當に入れて終つて、乘りかけた船だからと言つて、仕掛けた仕事を成功させて終つたので、救はれた人達が喜んで生活する一方、自分の身代が潰れて終つて、一時は慘めな事になつて終つたといふ噂だつたが、自分に關係のない事だから、いつの間にか忘れてゐたが、今さうして立派にやつて見える程なら、噂の様な事もなく、跡取りの息子がしつかりして、身代を持つてゐるんだね。」

「さあ　財産の事は一向聞いて來ませんから知りませんがね。」

「何故もつと財政狀態の事も、よく聞いて來なかつたんです。

緣談には釣合といふ事が、一番大事な事だのに。」

「お母さん、財産なんか、あつても無くてもかまはないではありませんか。

本人さへしつかりしてゐさへすれば……。」

「それはそんなものだけれど、深い親戚となれば、先の財政狀態がしつかりしてゐないと、絶えず色々な問題が起る樣な事になつては困るからね。」

「では親戚になつてから、時々金の融通を賴まれると、厄介だと仰有るのですか。」

「まあさういふ事も、世の中に澤山例しがあるのだから……。」

「しかしお母さん、今の後取りといふ人は、お父さんに負けない程のしつかり者で、とても義俠心の強い人だつて言ひますから、妹を嫁がせた先へ行つて、金錢の融通を賴むなんて事は、絶對にないと思ひます。」

「それはさうだけれど、念には念を入れよといふ事があるから……。

お前その娘をよく見て知つてゐるのかえ。」

「知つてゐます。話もして見たんです。」
「それでお前、氣に入つたつて言ふんだね。」
「卒直に言へばさうです。」
「では町長さんでも賴んで、向ふの事情を一應探つて頂いたらどうだらう。
血統その他の事は、平井の叔父さんに賴めば、丁寧に調べて頂けるのだから。」
といふ話になつて、早速町長に賴んで、調べて貰ふ事になりました。
聽て町長から、
「今の所財産は、中流であるが、兄は非常にしつかり者で、村のためにも人のために
も、身を惜しまず働いてゐるから、氣受けがよいし、母の性質もよく、妹の智惠子
も女學校を優秀で卒業し、體も健康で、性質も非常に溫良で、孝心深く、村の人から
賞められ者となつてゐて、一點非難の打ち所もない娘である。」
と報告されましたので、母の弟に當る平井の叔父といふのが、尙よく調べて見ます
と、

血統も非常によかつたので、內輪話が成立して、叔父から正式に申込んで貰ひまし
た。
すると、篠原家では突然の事として、母や兄の好雄は、
「藤村さんと言へば、大變な町の財産家で又名望家です。
だから折角だけれど、釣合はないだらうと思ひます。
父の時代だと、相當の仕度をして出せますけれど、今は御承知の通りの狀態でござ
いますから、藤村さんと釣合ふ樣な仕度は、到底調へられないと思ひますので、お斷
り致した方がよいと思ひます。ねお母さん。」
「さうです。折角御親切に仰有つて頂きまして、本當に有りがたい事と存じますけれ
ど、餘りお樂なお宅へ貰つて頂きますと、支度も相應な事が出來ませんし、後のおつ
き合ひにも骨が折れますので、お斷り致し度いと存じます。」
と言つて斷りましたので、叔父は歸つてその通りの事を、姉や甥の敏郎に傳へました。
母はその話を聞くと、一寸首を傾げましたが、敏郎は以ての外だといふ面持で、

「叔父さん、財産をつけて貰ふのではない。本人を貰ふのですから、釣物とか支度とか、後のつき合ひとかいふ様な事は、何も心配する事はありません。

それだけの事で斷ると言はれるなら、すみませんがもう一度行つて下さいませんか。昔と時代が變つて、形式よりも實質を尊ぶ時代ですから、釣物などは、こちらの方で持つて來て貰ふ事は、遠慮し度いと思ひます。

必要があれば、又こちらで幾らでも作つて着せます。

そして後のつき合ひなんてことは、唯眞心で交際すれば、物質などをあちらこちらへ送り屆けるなどゝいふ、冗な事はする必要がないと思ひます。

だから仕立ては少しも望まない。又後のつき合ひは眞心を以てする。

といふ、條件で、今一度話して見て下さいませんか。

ねえお母さん。それでいゝでせう。」

「さあ、そんなにお前の言ふ通りにばかりも行かないだらうが、お前がそれ程に言ふ

のなら、氣の毒でも叔父さんに、もう一度其通りに話して見て貰ふ事にしませうかね。」

母が同意したので、又叔父はその翌日月ケ瀬村の篠原家に來て、敏郎の意志を傳へました。

結婚

すると母の時江も好雄も、顔見合せて、暫く考へてゐましたが、

「では兎に角、一應本人に申聞かせて見たらごうでせうか。」

「さうだね。あの子の心持も一應確めて見る事が大切ですからね。」

と言つて、別室で智惠子の意志を確かめますと、智惠子は顔を赤らめて、

「お母様やお兄様が、行つた方がいゝと仰有れば、私行かせて頂きますわ。」

とはつきり申しました。

「お前敏郎さんといふ方を知つてゐるさうだね。」
と兄が言へば、
「はい、去年の春演習にお出でになつて、學校で休息なすつた時、お茶を差上げましたので、よく存じて居ります。」
「それではお前もお目に掛つて見て、よく知つてゐるといふなら、貰つて頂く事にお願ひしますか。
こちらとしては仕度も充分には出來ないし、後のおつき合ひだつて、眞心だけでといふ事を、先方から條件にしてゐて下さるから、その點も心配はないのだが、その代りお前の責任が重いぞ。」
「出來るだけ一生懸命で努力致しますわ。」
かうした相談の結果を、叔父に傳へると、
「それでは、さういふ事にして、是非お願ひ致します。
緣組してから後で、物質上で色々な問題が起きると、お互に氣拙くなりますから、

さういふ事は一切言はないといふ事にして頂く事にしませう。」
「さうして頂けば、そんな結構な事はございません。ではよろしくお願ひ申上ます。」
と話は圓滿に纏つて、その年の秋、目出度く智惠子は藤村家に輿入れしました。
何も仕立は一切しないといふ條件にはしたけれど、お家柄だけに、好雄は妹の體面上、出來る限り力を盡して、誰に見られても聞かれても、藤村家の嫁として、恥ぢないだけの調度品を持たせてやりました。
唯現在の境遇上、周圍に遠慮して、荷物を出す時は、最も質素にして、こつそり送つて終ひ、智惠子の目出度い門出の時も、華美な衣裳や裝飾を排して、地味で上品な花嫁に仕立てゝ、俥で母と自身と附添つて、藤村家へ送り屆けました。
藤村家では、約束に反し、調度萬端手落なく調へられて來た事、智惠子が近鄕に稀な、聰明で淑かで美しい花嫁である事を喜んで、母も親戚一同も心から喜びました。

松の綠

目出度く結婚式が濟んだ三日目の日に、二人は密月の旅に出かけました。
伊勢參宮をすまし、奈良大和京都方面を見物して廻り、誰に氣兼ねをする事もなく、
樂しい旅を續け、今日は安藝の宮島迄足を伸しました。
そして人懷こい、鹿に暫し戯れて後、二人は渚傳ひに歩いて行きました。
邊りに人影が見えなくなると、敏郎は
「智惠子、緣といふものは不思議なものじやないか。
お前と結婚して、こんな旅を續けるなんて……。」
智惠子は微笑んで、敏郎の顏を見上げ、
「本當に私、夢の樣でございますわ。

私この頃の心持は、日本中の幸福を、一人で集めた樣な感じが致しますわ。」
「いやそりやお前の言ひ方が違つてゐる。何故二人と言はないんだ。」
「でも貴方が、そんな風に思つてゐて下さるかどうか、分らないんですもの。」
「いや、僕はね、日本位じやない。お前と二人で世界中のあらゆる幸福を集めて終つた程幸福なんだよ。」
「まあ、本當にそんなに思つてゐて下さいますの？」
「當り前じやないか。好きで貰つた妻だもの。」
「おほゝゝゝ　私本當に嬉しい。私今死んでもちつとも思ひ殘す事はございませんわ。こんな幸福が、いつまでも續くでせうか。夢となつて破られはしないでせうか。今の私は、幸福で胸が一杯になつて居りますものを。」
敏郎はいきなり愛妻の手を握つて、
「何を言ふのだ。幸福はこれから永遠に續くんじやないか。
この世だけでなく未來までも……。」

「本當に嬉しうございます。私は何といふ仕合せ者でございませう。あんなお優しいお母様の子となり、貴方の様な親切な方の妻にして頂きましたのですもの。」

「だが智恵子、お前今そんなに喜んでゐて、軈てもう辛抱が出來ないなんて、僕を殘して行つて終つて呉れては困るよ。」

「まあ、あんな事を仰有つて……私どんな事があつたとて、假令死んだつて、貴方のお傍を離れませんわ。」

「では僕が死んだら、一緒について行くか。」

「もとよりでございますわ。どんな所だつて、私貴方となら屹度一緒に參りますわ。」

「屹度だね。忘れたら承知しないよ。」

「その代り貴方も、私をいつまでも、今の様に親切にして下さいませね。」

「勿論だよ。幾年たつたとて、僕の心に變りはないんだ。妻と信じ愛するのは、一生の中にお前一人だけと誓つておく。」

「ありがたうございます。私の心は、幸福に醉つて、倒れさうにさへ感じます。」

「こんな所で倒れられては困るから、宿へ歸らうね。」

敏郎はさう言つて、智恵子の手を固く取つて、輝かしく照す月光の下を夢の様な心地で歩いて行きました。

親愛の情

密月の旅から歸つてからも、二人の親愛の情は、いよ〳〵濃やかで、傍の見る目も美しいばかりでございました。

殊に長い間未亡人を通して、大分性格が頑になつてゐる姑幾代も、智恵子が痒い所へ手が屆く程にして、朝も早く床を離れ、下女下男を指圖して、料理や掃除萬端、

自分からまめやかに當るばかりか、母の寢床の上げ下しから、食事の世話その他眞心こめ嗜好に合せて、行屆いた孝養を盡します。

知らぬ間に炬燵の火も入れて、溫められ、三日に上げず蒲團も天日に干しては、垢の取れた、着心地のよい、輕い布團を、肌障りのよい白布に包んで着せて呉れます。

その他お風呂の事、髪の世話、着物穿物の事迄、よく氣をつけて、

「お母様、お湯の加減が、丁度よい様でございます。お入り下さいませ。」

と侑め、母が入ると、

「お母様、お脊中をお流し致します。」

といふ風に、一つとして、嫁としての嬉みに缺けた事はありません。

親戚の者が客に來ても、實にまめやかに、眞心こめて世話をするので、

「お宅のお嫁さんは、實によく出來た人だ。今世に珍らしい。」

と賞めない人はありません。

幾代も始めの中は、非常に喜んで、

「私も夫に早く別れて、永い間苦勞しましたけれど、その甲斐があつて、敏郎も人並みに人間になつて呉れましたし、世にも珍らしい程優しい親切な、そして賢い嫁を貰ひましたので、こんな嬉しい事はございません。

これで孫の一人も出來たら、もう何時死んでも極樂往生が出來ます。」

と何につけても、

「智惠さんや、智惠子や。」

と智惠子なしでは、一日も暮されない様に、重寶がつて可愛がりますので、親戚や近所隣の人迄も、

「嫁には難しからうと思つたあのお母さんが、存外優しくて、嫁に賴り切つてゐるから結構だ。

あれで藤村さんの所も、まづ圓滿に仕合せに行くだらう。」

と噂し合ふのでした。

だが外面は智惠子智惠子と喜び乍らも、餘りにも夫婦仲の睦じさを見る時に、喜び

乍らも、幾代の心には一種の言ひ知れない、心淋しさが芽生えて、愛しき我が子を智惠子に獨占させるのが、何となく遣瀬ない様な、腹立たしい様な氣がして、内心智惠子を憎む様な心持が萠し初めました。

「親としてこんな心を起してはならぬ。」

と我を戒しめ乍らも、それをどうする事も出來ませんでした。

兄の苦境

「智惠子も藤村さんへ貰つて頂いたばかりだし、今破産してはあの子にも色々と悲しみを見せる事になるから、何とか出來たらと思ふのだのだけれど……。」

「お母さん。貴女が仰有るまでもなく、私もその事を思つて色々奔走したのですけれど、どうも銀行の方が破産しかけてゐるので、待つて貰ふと言つても、方法がないの

ですよ。」

「それで銀行の方では、全部抵當物を處置するといふのかえ。」

「さうですよ。銀行の方へ抵當に入つてゐるものを處分して、預金者の方へ、引渡すといふのですよ。」

「では新しい債權者に賴んで、暫くの間待つて貰つたらどうだらう。」

「それがお母さん、うまく行かないんですよ。

大口の債權者が一人で、抵當物を銀行から引受けるのだと、何とか賴みやうもありますが、十人以上の債權者に、筆數が別々にして引渡される事になつたのですから、却々話が面倒で、それに一番私の困つた事は、この家屋敷周圍の田畑を抵當に取つたのが、お母さん御承知の河合村の工藤新平といふ人です。

それが非常に性格が利己主義で、義俠心とか情とかいふ様な事は塵程もない人間で、村でも餘り評判のよくない、我利々々の人間だけに、非常に子煩惱で、次男が餘り頭がよくないので、中學へも行かず、郡の農學校を二年行つたゞけで、うちで農業の手

傳ひをしてゐるのですが、今年二十四になるので、何處かへ分家させ度いと言つてゐるさうです。

所が今度の銀行事件で、預金の抵當として、この家屋敷と田畑を、一筆に書き込んだのが工藤の手に入つたので、本人は幾度も來て見て、この家や周圍の田畑が非常に氣に入つたといふので、何でも彼でも抵當物を引渡して呉れといふのです。

「さうすると、この家を引取つて、その次男をこゝへ分家させるといふのだね。」

「さうです。そのつもりで一生懸命運動してゐるのです。

それに工藤さんの山林や、苅場や炭木山が、この村に澤山あるので、それをそつくり次男に譲れば、この村へ來ても、一流の資産家として、巾を利かしてやつて行く事が出來るからといふので、非常に欲しがつてゐるのです。」

「工藤さんの方はさうなれば、都合がいゝだらうけれど、さうばかりも行かないよ。うちだつて、十代以上も續いた舊家じやないか。

そんなに易々と人手に渡して終つたら、御先祖様に對しても、申譯がないのだから。」

「私もさう思つてゐるのです。

しかし先力にさうしたもくろみがあるので、何と言つても、延期して呉れないので、實際困つてゐるのです。」

「どうせ人手に渡すなら、一そ外の方に買取つて頂いておいたら、又後で何とかして、買戻させて貰ふ事も出來るのだが、そんな方法はないものだらうかね。」

「それが出來ればいゝのですが、抵當に入れた頃は、世界戰爭の直後で、非常に景氣がよかつた時でしたから、抵當物に價値があつたのですが、今では土地も山も家も半額以下に下つてゐますから、外の人に買つて貰ふとなれば、問題にならぬ程安く手渡さなければなりません。

それに今の所この村では、安い時價に見積つたとしても、誰一人進んで買つて呉れる力のある人はないのですからね。」

「一體工藤さんの方へ廻つたといふのは、何處と何處だつたかね。」

「この家倉屋敷と、周圍の田畑全部です。」

「そつくり入つたんだね。」
「さうです。」
「それだと分家するに丁度頃合の身代だから、工藤さんが躍氣になつて欲しがるのも無理はないね。」
「それだけにこちらが困るのです。
工藤さんの手に入れば、もう一生それこそ末世迄、私の手に返る事はないから、名實共に篠原家はこの村から消滅するといふ事になりますから、そんな事になつては、お父さんや祖先に對しても濟まぬと思つて、この頃中出來る限り力を盡して見たんですが、思ふ樣にいかないのでお母さんにも色々心配かけてすみません。」
「私は、お前が餘り心配して、病氣にでもなつては大變だと、それを心配するんですよ。」
親と子は嘆息して、見交す眼には、涙の露が光りました。

里の一夜

こんな悲しみが實家に訪れてゐやうとは知らず、智惠子は夫を伴つていそ〳〵としてやつて來ました。
密月の旅から歸つて、間もない事とて、關西名所の土產物などを供に持たせて、に〳〵として入つて來ました。
「御免下さい。」
稟とした敏郎の聲に續いて、智惠子が、
「お母さん　お兄樣、お客樣に參りましたよ。」
二人はそれを見て、驚き慌て乍ら、
「おゝこれは〳〵ようこそ來て下さいました。

さあ〳〵どうぞ上つて下さい。」
と急いで座布團を出して、二人を迎へました。二人が座に着いて、一通りの挨拶がすむと敏郎は、
「早く一度御挨拶に上らうと思ひましたが、色々と雜用に取紛れて居りまして、失禮致しました。」
「いゝえ私の方こそ一度、御機嫌伺ひに上らなければならない所を、失禮致して居りまして申譯もございません。
お母様には御機嫌よろしうございますか。」
「はい、非常に健康で暮して居りますので、喜んで居ります。
今日も母から特によろしくと申して寄越しました。」
智惠子は夫が挨拶してゐる中に、土産物などを取出して、
「お母さん、これは宅からのお土産、これは私達が旅行しました時、行く先々で買つて參りましたお土産でございます。」

「まあ　そんなに澤山、色々とすみません。
貴方こんなに頂きまして、申譯ございませんね。」
と母は敏郎に向つてお禮を言ひました。敏郎は
「いゝえ。お禮を言つて頂く樣な品物ではありません。
行く先々で智惠子が見ては買つたのですが、名物に美味しいものなしといふ通り、變なものばかりですよ。」
「本當にお珍らしいものばかりでございます。では折角ですから頂戴致します。」
最も親しく懷しいお客を迎へた事とて、好雄親子は家の秘密を二人に知らせまいと注意致しましたが、隱せば現はれる譬への通り、その夜更けてから母と智惠子が爐燈裡の傍に坐つて、ひそ〳〵と語り合つてゐるのを、次の間に寢んでゐた敏郎が聞いて終ひました。
そして涙にむせんで泣いた智惠子の樣子が氣にかゝつたので、智惠子が寢室へ入つて行くと敏郎は、

「お前何か私に秘密にしてゐる事があるのではないか。」
「いゝえ、そんな事はございません。」
「無い事があるものか。お前先刻お母さんと何か話して、どうしたらいゝでせう。藤村さんへ知れたら困るとか何とか、話してゐたじやないか。」
「まあ　お耳に入つたのでございますか。」
「お耳に入つたかじやないよ。正式に結婚して、お互に深く愛し合つてゐるのに、泣く程の事があるのに、隠すといふのは、水臭いよ。差支へない事だつたら、話してお呉れ。」
「だつて私の口からは申上げられない事ですもの。」
「お前の口から話せないと言へば、結婚する前に私より以外に、愛人でもあつたといふのかい。」
「まあ、ひどい事を仰有いますのね。私がそんな女であるかないか、御承知の筈でございませんの？」

「だからさ、それ以外に夫である私に、打明けられない秘密なんて、ある譯がないと思ふのだが……。」
「でも外の事と違つて、うちの事情を今貴方にお話すると、私の幸福がすつかり破れて終ふんですもの。」
「何？　お前の幸福が破れる？　それは一體何の事だ。早く言つて御覧。」
「だつてお話すれば、私屹度離縁になりますもの。」
「離縁だつて？　何を言つてゐるんだ。お前は私と正式に結婚した妻じやないか。假令どんな事があつたとしても、離縁なんて事がある筈がない。若しどんな事情が起つたとしても、お前の夫である私がそんな事を承知する譯がないんだから……。だから話して御覧、又私の力で何とかなる事なら、御相談にも乗せて頂くんだから

……。」

「ではお話申上げますけれど……。貴方このうちは大變な事になつてゐますの。

ですからお母さんや兄さんは、自分の身の處置よりも、私の事を心配して、身が痩せる程苦勞してゐるんでございますの。」

とかいつまんで、母から聞いた、家の破産に瀕してゐる狀態を、涙と共に物語りました。

夫の情

それをぢつと聞いてゐた敏郎は、智惠子の話が終ると、

「さうだつたのか。そんな事情になつてゐるとは、ちつとも知らなかつた。

そうだつたら、何も心配する事はない。

何十萬といふ樣な額だつたら一寸困るけれど、多寡が八千圓位で、始末がつく事だつたら、私が何とか力になるよ。」

智惠子は吃驚して、

「まあ　貴方、そんな事をして頂いて、若しお母樣に知れたら、それこそ大變ではございませんか。」

「それはお前とも結婚したばつかりだしするから、今すぐに母に打明けても、それではお力になつて上げよと、母が快諾するかどうか分らないけれど、幸ひうちの財產は父がなくなつてからすぐ、私の名義に相續して終つてあるから、相當の抵當を入れて、銀行で內々借り込んで融通して上げたとて、お母さんに知れる樣な事はないから、心配する事はないんだ。

今夜はもう遲いから、安心して寢むがいゝよ。

明日の朝起きたら、私の方からお母さんや兄さんにお話して、八千圓融通させて頂く事にするからね。」

「だつて、そんな事をして頂いていゝでせうか。」
「いゝとか惡いとか、そんな事は當り前の事じやないか。
お前の實家の非常時だもの、知つた以上見て見ぬ振りはしてゐられないよ。
催促なしの無證文で御融通しておかう。
それだつたらお前、窮窟でなくていゝだらう。」
「そんな勿體ない事をして頂きましては、それこそ私が由譯ございません。
そんな大金を、結婚早々の私の實家のために、出して頂くなんて……。」
「金も浮世の寶に違ひないが、それよりもつと大切な寶は、よき妻だと私は思ふ。
お前といふ、私の掌中の寶を生んで育てゝ、無條件で與へて下さつたお母さんや兄さんに差上げる代償としては、餘り少い位だと、私は思ふんだ。」
「まあ　貴方は、そんなに迄私を信じてそして愛してゐて下さるのでございますか。」
智惠子は感極つて涙にむせびました。
翌朝敏郎は、さり氣なく朝食をすまして雜談の後、極めて氣輕に、

「兄さん、昨夜一寸智惠子から聞いた事ですが、お宅のお父樣時代からの事業の關係上、差迫つてお金が御入用ださうですが、外を色々御奔走になるより、折角かうして、智惠子と緣を結ばせて頂いた事ですから、私が取替へさせて頂き度いと思ひますが、如何でせうか。」
母と好雄は吃驚して顏色を變へ、
「まあ　智惠子、お前そんな事を申上げたのかえ。」
「いゝえ、智惠子が話したといふよりも、私がお母さんと智惠子の話を、眠られないまゝに聞いて終つたのですよ。」
「全く面目次第もありません。
この事だけは、お宅へは絕對にお耳に入れないで、始末しやうと思つてゐましたのに、大變な御心配をかけて終ひまして……。」
「いや　結構です。却つていゝ所へ伺つて、御事情がよく分つて幸ひでした。
兄さん、この上は、色々な方面に奔走して、お焦りになつてはいけません。

私にお委せ下さつて、四五日待つてゐて下さい。
屹度御人用なだけのお金は持つて來ますから……。」
「そんな事を貴方にして頂いてはすみませんから。」
「すむとかすまないとか、そんな御心配はいりません。
金は又どんなにでも融通がつきますが、天が與へて呉れた誠の妻は唯一人です。
言ひかへれば、眞實に理解があつて、信じ合ひ愛し合へる妻は、男子に取つては、何物にも代え難い寶です。
若しかうした事情のために、妻の幸福を失ふ様な事になれば、それは智恵子だけではなく私の不幸ですから、お宅の急場を救はせて頂ける爲なら、それ位の金は喜んで出させて頂きます。」
と言つて、母や兄を喜ばせ、智恵子を安心させておいて、その日の中に智恵子より一足先に歸つて行きました。
智恵子が命じられたまゝに、二三日實家で色々とその後の事に就て案じてゐると、

三日目の日に敏郎は、前よりも一層元氣よく入つて來て、
「お約束のお金を持つて來ました。」
と言つて百圓札ばかりで、八千圓の札束を、好雄の前に差出しました。
母と兄は目を瞠つて、
「こんな事を貴方にして頂いてはすみません。」
と怖々してゐるのを見ない様にして、
「まあ　他人行儀な事を仰有らないで、お役に立てゝ下さい。
それでなければ、折角持つて來た甲斐がありませんから……。」
と智恵子に向ひ、
「智恵子、今日はうちへ歸らう。
隨分長く泊つてゐると言つて、お母さんが待ちあぐんでゐるから。」
と智恵子を促して、歸り仕度をさせると、
「又お正月には、松の内に二人でお年頭に來ます。」

と言つて二人で歸つて行きました。

時江と好雄は、その後姿を見送つて、嬉し涙をこぼしました。

かくして破産する事は、未然に救はれて、篠原家では目出度い春を迎へる事が出來ました。

妹の心

東京の女子大學に學んでゐる敏郎の妹好美が、冬休みで歸郷してゐるために、豫て約束してゐた、鮎川秀子といふ學友が、遊びに來る事になりました。

この都會のしかも大富豪の令嬢である秀子を迎へるためにとて、好美が大袈裟に騒ぐので、そのもてなしのために地方にない様な贅澤な家具や裝飾品などを、必要以上に買込むやら、御馳走を註文するやらで、大變な事ですが、可愛いゝ娘の好美が體面

上必要だと言へば、母は厭な顔一つしないばかりか、却つて自分から進んで、好美の言ふが儘にお金を出し又買物に出かけたりするのでした。

敏郎は心の中で好美のする事を、餘りに突飛だとは思ひましたが、男が口を出す程の事でもないので、默つてゐました。

だが智惠子は之がために、色々と妹の好美に指圖されて、小使の様に使ひ廻されました。

「姉様は何も知らないのねえ。本式にはお膾一つ作れないじやありませんか。こんな變なもの、東京のお客様に出されやしないわ。」

などと皮肉な事を言つて、嫂を侮る様な態度を示しましたが、智惠子はちつとも氣にかけず、にこ〳〵として、

「私田舍の女學校を出たばかりで、本式の料理法など一度も習つた事ございませんので、何も存じませんから、お恥かしうございますわ。」

「出來ない〳〵と言つてゐたら、一生出來やしませんわ。

一家の主婦となつて、家庭を切り廻すのには、お料理位滿足に出來なくちや、不自由で仕方がないわ。」

今年明けて二十一といふ、女としては、智慧も分別も充分あるべき好美が、昨年秋迎へたばかりの嫂、しかも兄との間柄も睦じく、母にもよく優しく仕へ、近所親戚の人々からも、よき嫁御さんと、賞め讃えられ、一點の非難の打ち處もない智惠子に對し下女か下男に對する樣に、つけ〳〵と仕事を言ひつけるばかりか、聞くにも耐えられない樣な、物の言ひ方をするので、敏郎は聞き兼ねて、

「好美、智惠子はお前の姉さんなんだよ。餘り聞き惡い事は言はない方がいゝよ。それにどんなお客樣なのか知らないが、うち中大騒ぎをしなければ、迎へられない樣なお客樣なら、來て呉れなんて言はない方がよくはないか。うち中の者が迷惑だ。高貴の方でも、お迎へするのなら格別だけれど、少し金持の娘である位、それ程怖れなくてもいゝじやないか。

こんな田舍の町には、御馳走の材料なんか、そんなにないんだし、料理の名人もないんだから、東京から必要な物を持つて來て、そのお友達とお前と二人、料理の實習でもして、好きなだけ食べる事にしたらどうだ。

それだつたら、うちの者もお相伴が出來て結構だ。」

好美は屹となつて、兄を睨みつけ、

「お兄樣、隨分ひどい事を仰有るのね。

私の大切なお客樣をお招きするのに、そんな皮肉な事を仰有るなんて、……。

私 始終鮎川さんの所へ行つて、色々〳〵およばれしたりお世話樣になるんですもの。

一度位宅へ來て頂いて、おもてなししなくつちや、私の立場がないんですわ。

そんな事を、お兄樣はちつとも察しては下さらないのね。」

敏郎は笑つて、

「お前が始終お世話になるから、お禮のためにお招きし度いといふのはいゝさ。

けれどもそのために、うち中の者が迷惑したり、非難されたりしては堪らないから

ね。」
好美は一層むきになつて、
「お兄様、迷惑するつて仰有るのは、姉様の事？
又私決して姉様の事非難したりなんかしませんわ。
唯本當の事を言つたゞけなのよ。
それをお兄様が色々氣にかけて、私に叱言を仰有るなんて、おかしいじやありませんか。
そりや姉様は何も彼もよくお出來になつて、お兄様のためには、理想の奥様なんでせうけれど、この家へお出でになつたからは、お母様の本當の子らしいお嫁さんであつて欲しいわ。
そして私の信頼の出來る姉様であつて欲しいと思ひますわ。
お兄様ばつかりに氣に入るお嫁さんになる事ばかりに、汲々としてゐるなんてどうかと思ふのよ。」

「好美、お前何といふ事を言ふのです。
では智恵子は私にばかり優しく妻らしくして、お母さんやお前には、嫁らしく又姉らしくないといふのかい。」
「えゝ　さうなのよ。私お姉様に、もう少しこの家のお嫁さんらしく、私のお姉様らしくして頂き度いと思ふのよ。
それにはお兄様、貴方だつて反省なさる必要がお有りになるんじやありません？」
「何を反省しなけりやならないだらうね。」
「だつて姉様は昨年秋こちらへお出でになつたばかりではありませんか。
それだのに、お兄様はお母さんに秘密で、八千圓ものお金をお姉様の在所へ御融通なすつたつて、それ本當なんですか。」
敏郎の顔はさつと變りました。
「好美、誰にそんな事を聞いたんだ。」
「あらまあ　お兄様、そんな怖い顔なさらなくつたつて、いゝじやありませんの？」

「本當か嘘か、知りませんけれど、或る人から聞きましたわ。」
「誰だそんな事をお前に言つた人は？」
「告げた人よりもお兄様本當なんですか。違つてゐるのですか。」
「お前なんか、そんな餘計な事を聞く必要もないし、言ふ必要もない。」
「お兄様、私はこの家の養女でもなければ下女でもありません。
私はこの家で生れた、貴方と眞實の血を分けた唯一人の妹です。」
「そんな事は言はなくても分つてるじやないか。
だからこそ小さい時から、お前を出來るだけ可愛がつて、お前がどんなに我儘な事を言つても忍べるだけは忍んで、お前を滿足させて來た。
しかし乍ら、お前がこの家に生れた、眞實血を分けた、唯一人の妹であると共に、私はこの家に生れた、正當な長男なんだ。
だから家の身代の事については、私に權利があるんだから、假令人がどんな噂をしやうども、それを眞に受けて、眞正面から今の様な事を言ふと、私としても非常に不

愉快に思ふんだ。」
「すみませんでした。
私が妹の分際で、お兄様の權利に喙を入れたりして……。
以後注意しますから、御免下さい。
でもお母様の耳にも入つてゐますから、御用心なさらないと、大變な事になるのよ。
お兄様の爲を思つて、御注意のために申上げておきます。」
と言ふと、好美はつと座敷の方へ入つて行つて終ひました。
敏郎はその後を見送つて、眉をひそめて立つてゐると、智恵子がお勝手口から、目に涙を一杯ためて、
「貴方……」
と小さな聲で呼びかけました。
敏郎はその聲に振返つて、何氣ない顔をして、
「何でもないんだよ。心配しなくてもいゝ。」

と言つて、自分の書齋に入つて行きました。

こんな氣拙い事は、あつたけれども、嬶て好美は驛迄秀子を迎へに行つて、午後一時頃衣裳裝身具等、眩いばかりに着飾つた秀子を伴つて歸つて來ました。

家中の者は下へも置かず、

「よくこそお出で下さいました。」

「こんな草深い田舍へ、お出で下さいまして、さぞ吃驚なさいました事でせう。永い汽車の旅で、どんなにかお疲れになりましたでせう。」

と心からもてなしました。

秀子は如才なく、

「好美さんが、是非遊びに來る樣にと、餘り御親切に仰有つて下さいますので、つい お言葉に甘へてお伺ひ致しました。

何分よろしくお願ひ申上ます。」

と丁寧に次々に挨拶しました。

そして敏郎に挨拶した時は、何故か秀子は、我にも非ず、胸が躍つて、顏をさつと赤らめました。

食事が終つて一休みして、好美と秀子はお湯に入つて、お化粧をすますと、歌留多を取らうと言ひ出しました。

歌留多會

そして好美は近所の娘達を四五人集めて來て、景色のよい離座敷の十疊で歌留多會を始めました。

八人の人達が源平に分れて、取り始めましたが、好美は秀子と敏郎を白の組に入れわざと智恵子と組を別にさせて、二回勝負をしました。

今日ばかりは、母の幾代も若返つた氣持で、美しい聲で、火鉢の傍に坐つて讀み手

の役を買ひました。
「お母さん、とてもうまいですね。
節廻しなんか、とても素晴らしいよ。」
と敏郎が賞めれば、秀子はそれに續いて、
「小母さん、ほんとうにお上手でゐらっしやいますわ。
お聲を聞いてゐると、お若い方の様です。」
智恵子もそれに續いて、
「お母様がこんなにお上手にお讀みになる事、私ちつとも存じませんでしたわ。」
幾代はそれを聞くと笑つて、
「智恵子、田舎のお婆さんは、臼碾き歌か、小守歌しか歌へないと思つてゐたんだらう。」
「いゝえ　お母様、そんな事はございませんけれど、餘りお上手なものでございますから、吃驚致しました。」

「全くでございますわ。
私毎年歌留多會に出ますけれど、小母さんの様にお上手にお讀みになる方は、存じませんわ。」
「まあ　お世辭がお上手ですこと。」
「お世辭じやございません。本當でございますわ。」
「ではもう一度お母様に讀んで頂いて、一勝負してから、お菓子を頂きませう。」
と好美の言葉に、又札を竝べて取り初めました。
この時好美は何を見つけたのか、ふと頓狂な聲で、
「姉様、貴女、お兄様から頂いたエンゲージリングどうなすつたの？」
智恵子は吃驚して、
「あの先刻お湯に入らせて頂きました時、拔いて棚の上に置いて忘れてゐましたから、持つて參りますわ。」
「まあ、大切なエンゲージリングをお忘れになるなんて、ひどいわね。」

「本當に粗忽致しまして、申譯ございません。
すぐに行つて取つて參りますわ。」
と智惠子が立かけると、敏郎は押止めて、
「いゝじやないか、この勝負がすんでからで……。」
「だつてあんな高價なの、なくするといけませんから、すぐ取つてゐらつしやるといゝわ。」
「本當にさうでございますわ。すぐに持つて參ります。」
智惠子は急いで立つて行きましたが、いつまでたつても歸つて來ません。
「どうしたんでせうね。姉さんは？」
好美はさう言つては、湯殿の方ばかり見凝めてゐます。
聽て顏色を眞蒼にして、目頭を泣きはらした智惠子はしを〳〵として入つて來ました。それを見ると好美は、
「姉樣、ございましたの？」

「あの　私、確かに置いたと思ひましたけれど幾ら搜してもございませんの。」
「まあ、無いんですつて？
私達は姉樣より先に入つたんですし、姉樣より後で入つた方と言へば、貴女のお實家のお母樣だけじやありませんの？
ちいやもたけもまだ入つてゐないでせう。」
「はい　母は確かに私と入れ替りに入れて頂きまして、先程歸つて參りましたんですけれど……でも母が私の指輪なんか持つて歸る譯はございませんのに、どうしたのでございませう。」
敏郎は堪り兼ねて、
「實はあの指輪は、私が中へ苗名を彫り込んでおき度いと思つたが、それがしてないから、先刻湯殿で見つけたから、錺屋へ持つて行つて、苗字を入れる樣に頼んでおいたから、直きに出來て來るよ。」
「それならお兄樣、何故もつと早くさうと仰有らないんですの？

姉様が泣いて心配してゐらつしやるのに。
私は又實家のお母様が、お持ちになつたのかと思ひましたわ。」
「お母さんが持つて行つて、何にするんだ。」
「そりや何にだつてなりますわ。高價な品ですもの。
私本當は、お姉様が、お母様にお上げになつたんじやないかと思ひましたのよ。」
「何故そんな變な事を言ふんだ。」
「だつて私、ふとそんな事を思つたんですもの。
ある方から、或るお話を聞いたものですから……。お兄様、あの指輪は五百圓お出しになつたんですつてね。隨分いゝ石でしたのね。姉様。
だけど幾らでも、高價なのがあるものですわね。
秀子さん、貴女の指輪お幾らでしたつけね。」
「あら、こんなもの、つまらない安物ですわ。」
「でもいつかそのダイヤ五千圓だつて仰有つたじやありませんか。」

「えゝ　父にねだつて買つて貰つたのですけれど、こんな安物つまりませんわ。」
幾代は吃驚して、
「まあ、五千圓ですつて？　一寸お見せ下さい。
私そんな大した指輪見た事がありません。」
「つまらないものですわ。一寸見ると硝子玉みたいですの。」
秀子はさう言ひ乍ら、指から拔いて見せました。
「これが五千圓ですつて？　まあ大したものでございますのねえ。
私共が見たのでは、どんなのがいゝのか、薩張り分りません。」
と一生懸命で眺めてゐます。
智恵子はその席に居堪らなくなつて、何時か自分の部屋に歸つて、壓の上に俯伏して、聲も立て得ず忍び泣くのでした。

片思ひ

今しも町を外れて、お宮の前へ來ると、好美は

「ねえ　鮎川さん、こんな田舍つまらないでせう。」

「いゝえ　とても閑靜で、私好きだわ。

いつまでも〳〵一生こんな美しい所に住み度いと思ふわ。

こんな美しい川が流れてゐて、あんな美しい高い山が目の前に見えるんですもの。

素晴らしいと思ふわ。」

「まあ、そんなに貴女、こんな田舍が氣に入つて？

それだつたら貴女、田舍にゐらつしやいよ。」

「ゐたつて仕方がないじやありませんか。」

好美は笑つて、

「お兄樣とお嫂樣と結婚しない前だつたら、貴女にお嫂樣になつて頂くとよかつたわね。」

秀子はさつと顏を赤らめて、

「まあそんな事、出來るものですか。」

「こんな田舍なんかへ、貴女厭だわねえ。」

「あら　さうじやないのよ。私なんかとても貴女のお兄樣の樣な方には、貰つて頂く資格がないつて言ふのよ。」

「まあ　貴女の仰有る事がいゝわ。

資格だなんて……だけどうちのお兄樣の事、貴女どう思つて？」

「私貴女のお兄樣だから、屹度立派な方だとは思つてゐましたけれど、お目にかゝつて見て、見せて頂いたお寫眞よりずつとお立派な、貴公子の樣な方なので、吃驚致しましたわ。

こんな田舎の町の方の様じやありませんのね。」
「貴女私のお兄様お好き？」
「えゝ　とても好きよ。あゝいふ方。
だけどそんな事内緒よ。そんな事言つたら大變ですもの。」
「言はないわそんな事。だけど貴女が本當にお兄様が好きなのなら、お兄様のお嫁さんに來て呉れない？」
秀子は吃驚して、
「まあ冗談も大概にするものよ。
藤村さん、お兄様にはあんな歴とした、素晴らしい奥様がお在りになるじやないの？」
「鮎川さん、貴女あのお嫂様の事、どんなに思ふ？」
「お優しい奇麗な、いゝお嫁さんだと思ひますわ。」
「表面ばつかりお上手で、お兄様にばつかり甘へて、厭な人だと思はない？」

「あら　そんな事はないわ。
でも隨分お二人はお睦じいのね。」
「本當よ。見てゐられないのよ。朝から晩迄甘つたるい事ばかり言つてゐるんですもの。」
「だつてまだ　結婚なすつて早々ですもの。當り前じやありませんの。」
「でも親兄妹の手前つて事もありますわ。私ちつとどうかしてゐるんじやないかと思ふのよ。」
「あら　そんな事言ふものじやないわ。
貴女だつて好きな旦那様の所へ行けば、屹度さうなるわよ。
だけどあんなにお二人の仲が睦じければ、結構じやありませんか。
お母様だつて貴女だつて、喜ぶのが本當だわ。」
「所が喜べない事があるのよ。
だからお嫂さん、近い中に離縁になるかも知れないの。」

秀子は吃驚して、

「えゝ？　離縁ですつて？　一體それはどうした譯なんですの？」

「貴女だけにお話するけれど、お母さんも今、表面は知らない振りをしてゐらつしやるけれど、心ではとても憤慨してゐらつしやるんですの。

だからよい時機を見て、斷然離縁すると云つて、決心してゐるんですのよ。」

「まあ　あんな優しいお嫂様、それにお二人があんなに、お睦じいのに、何故なのでせうね。」

「それは大きな聲では話されないのですけれど、お嫂様のうちは、とても澤山の負債があつて、その爲に昨年暮に債權者から嚴しい督促を受けて、破産しかけたのよ。

そんな事情ともちつとも知らないで、相當の身代のある風に裝つて、お嫂様を私の宅へ輿入れさせて置いて、破産しかゝると、お兄様に内々泣きついて、八千圓といふお金を出させたんですの。」

「まあ　そんな事があつたんですか。」

「それもうち中話し合ひで、お母さんが承知の上ならいゝのだけれど、お母さんに内緒で、お兄様が銀行からお金を出して、融通したんですつて。

それが母の耳に入つたものだから、母は腹を立てゝ、婚約をする時、どちらも物質上の事では、厄介をかけぬ樣にと、ちやんと約束しておいたのに、結婚早々夫に泣きついて、親に内緒で實家へお金を貢ぐなんていふ樣な、大膽な事をする人を、嫁にしておけば、將來どんな事を仕出來して、先祖代々大切に守つて來た、身代を失つて終ふかも知れないからよい時機を見て實家へ歸すつて、母が言つてゐるんですの。」

「まあ、貴女のお嫂樣、そんな大膽な事をする方なの？

人つて見かけに寄らないものですわね。

あんな優しいお顔をしてゐらつしやるのに……。」

「ねえ　驚いたでせう。

私　東京から歸つて、お母さんや叔父さんから、その話を聞いて、とてもお嫂さんが憎らしくて堪らないから、少しは身に浸みる事を言つて上げやうと思つて言ふと、

その度にお兄様が邪魔して終ふのよ。
昨日の指輪の事でもさうですの。」
「あら、指輪つて言へば、あの事どうだつたんですの？
お兄様の仰有ること、本當でしたの？」
「あんな事出鱈目よ。嫂さんの急場を救ふために、あんないゝ加減な事を言ふの。お兄様つてば、嫂さんの事となると、とても憎らしいのよ。」
「だつて嫂さんがおゝきになつた指輪つて、どうなつたんですの？
貴女、お實家のお母さんがどうとかつて、とても皮肉な事を言つてらつしたじやないの？」
「さうよ。私それとなしに、少し嫂さんに當てつけてやらうと思つたのよ。」
「だつてお母さんが御存じのない事でせう。」
「勿論よ。」
「ではどうなつてるの？　その指輪。」

好美は笑ひ乍ら、蓋口を出して、
「こゝにあるのよ。これ御覽なさい。」
秀子は吃驚して、
「あら　貴女、罪だわ。そんなひどい事をして、お嫂様を虐めては。」
「だつて虐める事が出來なかつたじやありませんか。
お兄様があんな事を言つて庇つたばつかりに。だから私口惜しくて仕方がないのよ。
私どうしてもあの嫂さん、蟲が好かないの。
私にでも母にでも、親切にすればする程厭な感じがするのよ。
性が合はないとでも言ふんでせうね。」
「そんな事を言つたつて、仕方がないわ。
貴女のお嫁さんじやないんだもの。
お兄様にさへお氣に入つてゐらつしやれば、それで滿足しなくつちや。」

猜疑心

「幾らお兄様の氣に入つてゐたつて、うちの身代を片つ端から、實家へ運んで終ふ樣な、怖ろしいお嫂樣なんか、いつまでも家に置いたら、末にはどうなると思ふの。

母も私も丸裸にされて、この町から出て行かなくちやならなくなるわ。

お兄樣は自業自得だけれど……。」

「そんなひどい事仰有るものじやないわ。

だけど藤村さん、本當にお母樣もお嫂樣を、離緣すると仰有るのですか。」

好美は頷いて、

「さうなのよ。母は嫂さんを離緣する事に、すつかり決心してゐるんだけれど、二人があんなに睦じく、殊にお兄樣が、天にも地にも、嫂さんの樣な女は二人とないと思つて、有頂天になつてゐるんだから、うつかりした事を言ひ出して、お兄樣の氣持をぐらつかせて終ふと、始末が出來ないから、離緣する前に、嫂さんに勝る程の人を見付けておいて、離緣するとすぐに後へその人を迎へて、お兄樣の心持を變へさせて、うちの身代に將來瑾のつかない樣にし度いつて、とても焦つてゐるんです。

表面は、蟲も殺さぬ樣な顏をしてゐますけれど、あれで母は苦勞人ですからとてもしつかりしてゐるのよ。

だからいざとなれば思ひ切つた事をするだけの、決斷力があるのよ。」

「本當にしつかりしたお母樣で、貴女は幸福だわね。」

「だから　貴女がこんな田舍が好きで、お兄樣が再婚でもかまはないから、來て下さるといふのなら、母はどんなに喜ぶ事でせう。

私だつて本氣になつて奔走するわ。」

「餘り無理な事をして、御離緣なさるのは、お嫂樣がお可哀さうだけれど、圓滿にお話合がついて終つた後だつたら、私喜んで貰つて頂きますわ。」

「本當に來て下すつて？」
「だつてそんな事、却々思ふ様に行かないものよ。」
「屹度私、思ふ様にするわ。お誓ひしてよ。ね、屹度私のお嫂様になるつてお約束して頂戴。そしたら私どんなに嬉しいでせう。」
「本當にそんなになるんだつたら、私もどんなにか嬉しいんだけれど……。
私、だけど貴女の思つてゐる様な、優しい嫂さんになれないかも知れないわ。
お母様にだつて、今のお嫂様の様に親切に出來ないかも知れないから、一寸心配だわ。
でもお兄様にだけは、今のお嫂様に負けないだけの情實は盡せると思ふわ。」
好美は笑つて、
「貴女つてば、隨分勝手な事を仰有る人ね。私驚いちやつたわ。」
「私本當の事を言ふと、お目にかゝらない先、お寫眞を見た時から、好きで〳〵堪らなかつたんですもの。」

「それだつたら尙更、今のお嫂様を離緣したら、屹度來て下さいね。」
「お兄様が貰つて下さると仰有れば、喜んで參りますわ。
だけど藤村さん、私貴女も知つてゐらつしやる通り、我儘だけれど今からお誓ひしておくわ。
私お嫁に來てから、お宅のお金を決して實家へ頂いて行つたりなどしませんわ。そして私若し貰つて頂けたら、私の分として、父が貯金して呉れてある十萬圓ばかりのお金を、そつくりお土產に持つて來ますわ。」
好美は目を輝かして、
「あら　貴女それは本當？
十萬圓ものお金を、お土產に持つて來て下さるんですつて？」
「えゝ、本當よ。それだけはお約束出來てよ。」
「まあ　素晴らしいのね。十萬圓なんて、全財產を上げても、それだけ持つてゐる家は、この町にだつて、指を折る程しかないのに……。

それだつたらその事も私お母さんに話して、貴女の心持を傳へますわ。
そして屹度貴女に、お兄様のお嫁さんに來て頂ける樣に手順を運んで終ふわよ。」
「だつて無理をなすつちやいけませんことよ。
お嫂樣がお可哀想ですから。」

針を包んで

敏郎は村の青年團を引率して、九州地方へ十日間の豫定で旅行する事になりました。
その出立の際、幾代は
「敏郎、お前が旅行して來る間、智惠子は實家へやつてもいゝでせうね。」
敏郎は吃驚して、
「私が留守になるのに、智惠子迄實家へやつたら、うちが淋しくなるし、お母さんも

御不自由ではありませんか。」
「たけもゐるし、彌助もゐるから、別に不自由な事はないよ。
又特別な用事でもあれば、平井の弟に來て貰ふ事にするから……。
今年になつてまだお年頭にも行つてゐないんだから、兼ねて遊びにやらうと思ふよ。」
「お母樣さへお淋しくなければ、やつて下さい。
智惠子、お母樣があゝ仰有るから、都合のいゝ日にやつて頂きなさい。
餘り長泊りをせぬ樣にして、早く歸つてお出で。
うちにも色々用事があるんだから……。」
智惠子は喜んで、
「有がたうございます。お留守に實家へなどやつて頂きましてすみません。」
「實家へ行つたら、お母さんや兄さんに、まだお年頭にも伺はないで、失禮してゐてすみませんとお詫びして、よろしく申して呉れ。」
「はい　左樣に申します。」

かくして敏郎は、何のこだはりもなく、元氣で青年團を引率して、視察旅行に立つで行きました。

その日母の幾代は、いつもより機嫌よく

「智惠子、髪を結つて來て、在所へ行つてお出で。」

と色々土産物なども調へて、親切に世話をしますので、智惠子は心嬉しく

「お母様、旦那様のお留守に、實家へなどやつて頂きましては、恐れ入りますけれど、では二三日やらせて頂きます。」

幾代は機嫌よく、

「そんなに急がなくてもいゝから、ゆつくり泊つてお出で。

敏郎も十日位は歸らないさうだから……。

「はい　有りがたうございます。でも餘り長く泊らせて頂きましては、お母様に御迷惑をおかけ致しませうから……。」

「私の事はちつとも心配いらないのですよ。子供でも大勢出來ると、ゆつくり實家へ

も歸られなくなるから、ゆつくり泊つてお出で。」

智惠子は姑の優しい言葉を聞くと、思はず感謝の涙が滲みました。そして

「こんな優しいお母様のためなら、どんなに身を盡してゞも孝行しなければならない。

本當に私は、こんないゝお母様の嫁として貰つて頂けて幸福だ。」

としみ〴〵思ひました。

間もなく髪を結つて來て支度をすると、智惠子は彌助に送られて、いそ〳〵として實家へ歸りました。

母の懷

智惠子の顔を見ると、母のとき江も兄の好雄も心から喜び、

「おゝ　智惠子、よく來て呉れた。」

「まあ　お前よく來させて頂けたね。」
「あの主人も一緒に來る筈でしたけど、町の青年團を引卒して、九州方面へ視察に行つたものですから、失禮しましたけれど、よろしくと申して寄越しました。」
「さうかえ。正月早々から御苦勞だね。
お母様は御機嫌よくお出でかえ。」
「はい、とても御機嫌よくて、主人の留守中は、實家で遊んで來てもいゝつて、勸めて寄越して下さつたのです。」
「よくまあ二人も留守では、さぞお困りでせうに。」
「私もさう申し上げたのですけれど、お母様は子供が大勢出來ると、却々ゆつくり實家へも行けなくなるから、氣長く思つて遊んでお出でつて、それは親切に仰有つて下すつたんですの。」
「勿體ない。よくそんなに仰有つて下さること。本當にお優しいお母様だね。
でも敏郎さんが留守なら、餘り長く泊つて行つても惡いから、二三日泊つたら歸るがいゝよ。」

「えゝ　私もさう思つて居ります。」
母は智恵子の赤い手柄をかけた、美しい丸髷姿をうつとりと見凝めて、
「お前日本髪がよく似合ふよ。何處で結つて貰つたの？」
「お母様、こんな髪私に似合ひませうか。
主人が一度結つて見よ。と餘り勸めるものですから、お正月一度結つたのですけれど、私は初めてなので、何だか重くて、變な心持がしましたけれど、でもお母様や主人が、似合ふ〳〵つて、とても賞めて下さいましたので、又結つて來ました。」
好雄は笑つて、
「日本婦人の丸髷といふものは、世界一優美なものだ。
私はいつもさう思つてゐるよ。殊に智恵子はよく似合ふ。
美しいお嫁さんに見えるよ。」
「まあ　お兄様、ひやかしちや駄目よ。

こんな重い髪、私厭だつたけれど、お母様が一度はお母さんや兄さんに見せて上げよとお勸めになるものだから、その氣になつて結つて來ましたの。

そして兄さん私寫眞を内緒で撮つて來たんですよ。」

「ほう、丸髷姿の記念寫眞を撮つたのか。」

「記念つていふ譯でもないけれど、こんな髪を結ふ事は、餘り終始ありませんから、ふと途中で思ひついて撮つたまでゞすの。

奇麗に撮れたら、一枚送つて寄越しますわ。」

「是非一枚お呉れよ。記念になるから。」

智恵子が美しい丸髷姿で、機嫌よく歸つて來たので、母も好雄も喜んで、去年の秋急場を敏郎に救はれた時のお禮など言ひ出して、

「去年は本當に大變な所を、敏郎さんに救つて頂いてすまなかつた。」

その話が出ると、智恵子はさつと顔を曇らせました。

「そんな事濟んだ事ですから、何も仰有らないで下さい。世間の口が煩いですから。」

とその話題から避けやうとしますので、母もその事については、餘り口に出さない樣にしてゐました。

親子は水入らずで、二日間和やかな樂しい日を送りました。

三日目になると、午過ぎに突然、平井の叔父勇藏がやつて參りました。

思ひがけない時に、仲人である叔父が來たので、智恵子は吃驚して、

「まあ　叔父樣、ようこそお出で下さいました。

どうぞお上り下さいませ。」

「これは平井の叔父樣でございますか。

ようこそお出で下さいました。智恵子が大變お世話樣になりまして有りがたうございます。」

「いや　私こそ、色々智恵さんに厄介ばかりかけて居ります。」

と一通り挨拶がすむと、勇藏はさも言ひ出し惡さうにしてゐましたが、軈て智恵子に向つて、

「一寸こゝを遠慮してゐて呉れませんか。少しお話しなければならぬ事があるから。」
と言ひました。智恵子は、叔父にさう言はれると、
「私がゐましては、御都合の悪いお話でございませうか。」
「いや、さういふ譯でもないが、なるなら一寸この席を外して貰ひ度いのだ。」
好雄は機轉を利かして、
「智恵子、叔父様があゝ仰有るのだから、一寸その邊りを散歩でもしてお出でよ。」
「はい、では暫く失禮致します。」
智恵子は叔父が何の話に來たのか、不思議でならないので、後に心を殘しつゝ、表の方へ出て行きました。

月に叢雲

智恵子の足音が遠くに響き、聽て聞えなくなると、勇藏は如何にも言ひ惡さうに
「實は私が今日伺つたのは、外ではありません。姉から飛んでもない事を言付けられて、斷るにも斷れず、仕方なく伺つたのですが、全く自分としては、この上もない心苦しいお使に參りました。」
とき江と好雄の顏はさつと變りました。
「叔父様、それは一體どんなお話でございませうか。」
「それが私の口から、何とも申惡くて言ひ出せない樣な事ですが、姉が申しますのには、折角緣があつて、智恵子さんに來て頂いたのだから、今更こんな事を申上げては

誠にどうもお宅様へ對しても、申譯のない事ですが、あの人はどうも家風に合はないから、このまゝ居つて頂いても、お互に不幸だから、この際あれこれと言葉に角を立てないで、何も言はずに引取つて頂いて來る樣に。

とこんな事を申すのでございます。」

とき江と好雄は、餘りの事にさつと蒼ざめましたが、

「智惠子は家風に合はぬから、何も言はず引取る樣にと、お母樣が仰有るのでございますか。」

勇藏は頭を搔き乍ら、辛さうに

「實はさういふ分らぬ事を言ふのでございます。」

好雄は坐り直して、言葉を改め、

「しかし智惠子は、敏郎さんの嫁として遣はしたのですが、離緣といふ事になれば、勿論敏郎さんは御同意なのでせうね。」

「いや　實は敏郎は何も知らないで、青年團を伴れて、九州地方へ旅行に行つてゐる

んです。」

「では　御本人の敏郎さんが、その事は御承諾して居られないのに、お母樣お一人のお考へで、智惠子を離緣すると仰有るのですね。」

「はい、全くさうなので、姉一人の考へでございます。」

「それはどうも腑に落ません。

御主人である敏郎さんにさへ御相談もなく、突然お母樣一存で、突然離緣なさるといふのは、よく〳〵の事情がお有りになつての事でせう。

智惠子のどういふ所が、お氣に召しませんのでございませうか。

それを承り度いと存じますのですが……。」

好雄に强く問ひ詰められると、勇藏は如何にも困つたらしく、

「智惠さんには何一つ惡い事はない。

誠に優しいゝ嫁だと言つて、姉も喜んではゐるんですが……。」

「それではどういふ理由で、離緣すると仰有るのでございませうか。」

「甚だ貴方様方の前で申悪い事ですが、姉の申しますのには、智恵子は嫁として、何一つ申分はないが、結婚して間もないのに、親に内々で敏郎と相談して、莫大な金を實家へ勝手に御融通する様では、藤村家の將來が案じられるから、この際敏郎が何と言ひませうと、御先祖に代つて、きつぱり離縁するつて申すのでございます。

何にしても永い間、未亡人で通して、あれだけの身代を守つて來た姉でございますから、性根がしつかりしてゐますので、言ひ出したら何と言つたつて、後へ退く様な性質ではありませんから、私も昨日呼びつけられてから夜更け迄、色々と話をして、考へ直す様に意見したのですけれど、いつかな承知しません。

お前が仲人だから道を渡るべきだが、厭だといふなら自分で行くなんて、無茶な事迄言ひ出しまして、私もつく〳〵困り果てました。

私も自分としては、誠に來悪い所ですが、かうした事情ですから、止むを得ずお願ひに上りました。」

勇蔵の話を聞くと、とき江と好雄は顔見合せ、深い嘆息をついたまゝ、暫くは言葉

もありませんでした。

好雄は歯を噛み締め、目を閉ぢて、ぢつと考へてゐましたが、軈て

「あゝ　さうでしたか。

いやよく分りました。こんな事になつてはと思つて、極力その時御辭退しましたのですが、敏郎さんが餘り御親切に仰有つて、お金迄持つて來て下さいましたので、遂御厚意を受けて、一時拜借したのが、私一生の誤りでした。

その時お母様の御承諾はなくてもよろしいでせうか。と念をついたのですけれど、敏郎さんは當分自分の一存にしておいて貰つた方が圓滿だと仰有るし、私も五年もたてば、必ず元利共御返濟出來る自信がありますので、急場に迫つてゐたゝめに、遂お借りして終ひましたのでした。

御承知の通り、私の所の父が、殘しました事業も却々大きなものですが、それだけに人に知れない負債も殘しておいて呉れたものですから、父に不平を言ふ譯ではありませんが、德は父が持つて行つて、後の負擔は私が責任を持つといふ始末で、別に愚

痴を言ふ譯ではありませんけれど、逐世間に面白ない樣な事になりまして、切迫詰つた折柄、敏郎さんがふと來合せて下さつて、捨てゝは置けぬと言はれて、進んで御融通して頂いた樣な譯で、私共は一言半句もお願ひしたものでもなければ、勿論智惠が事情を訴へて、お縋りしたのでもないのですが、結果を御覽になれば、お母樣が智惠を大それた嫁だとお思ひになるのも、御尤もだと存じます。」

「さういふ譯ではないのですが、一寸前以て姉の耳に敏郎が入れておくとよろしかつたのに、無斷で御融通したものだから、姉が色々誤解して、智惠さんを疑つてゐるんです。

誠にどうも困つた事になりました。」

「智惠に行屆きませぬ點があつて、お母樣が左樣に仰有るのでしたら、行屆かぬ點だけ承つて、意見して見るといふ事もありますが、敏郎さんから御救濟願つた、お金の事がお母樣のお耳に入つて、御立腹になつたのでしたら、何程お願ひして見ても、到底駄目だと思ひますから、引取れと仰有れは、引取らせて頂きますが、御融通願つ

たお金の事も、處置をつけねばなりませんから、兎に角敏郎さんがお歸りになつて、一應お目にかゝつた上で、解決させて頂き度いと存じますから、さういふ事にお願ひ出來ませんでせうか。」

勇藏は頷いて、

「御尤もです。貴方の仰有る通りでございますが、困つた事が一つあります。」

「それについて、何か御事情があるのですか。」

「女といふものは、言ひ出したら、始末に行かないもので、私に智惠さんを引取つて頂く事をお願ひに出よといふだけの事なら、まだ穩かですが、姉の申しますのには、序だから荷物を一緒に屆けて呉れと申すのです。」

「荷物？　智惠子の嫁入の荷物ですか。」

「さうです。眞に申譯もない事ですが……。」

好雄は呆れ果てゝ目を瞠り、

「離婚の話がつかない中に、荷物を返すと仰有るのですか。」

勇藏は冷汗を拭ひ乍ら、
「誠にどうも何とも申譯もない事を申出しまして……。
その言ひ分には、敏郎がゐる時だと、又あれこれと面倒な事をいふから、敏郎のゐない間に本人も荷物も返して終つておく方がいゝ。
それにまだ入籍もしてゐないんだから、本人と荷物さへ受取つて貰へば、それで一切は手切れだ、とこんな得手勝手な事を申して居りますので、誠に以て困り果てました。
私も仲へ入つて、こんな困つた事は、生れてから始めてでございます。」
勇藏は本當に困つたらしく、寒中といふのに、幾度も手拭で、額に滲み出る汗を拭ふのでした。
その有樣をぢつと見凝めたまゝ、とき江も好雄も暫く何とも言ひません。
どう處置してよいのか、途方に暮れて終つたのでした。
この時表から人夫が入つて來て、

「御免下さい。藤村さんからお荷物を持つて參りました。」
と申しました。
三人はそれを聞くと、ハッとしました。
「何？　荷物を持つて來た？　本當か。
何うして持つて來たんだ。」
勇藏が急き込んで聞くと、
「貨物自動車です。」
勇藏は益々困り切つたらしく、
「何たる事をして呉れたのだ。あゝは言つてゐたものゝ、まさかと思つてゐたのに。
一徹者といふものは、始末に負えぬものだ。
私は穴でもあつたら入り度い。
人の立場も考へないで、身勝手な事ばかりして……。」
この勇藏の窮場を見ると、好雄は堪り兼ねて、

「叔父様、それでは兎に角荷物は預りませう。話は後でも出來るのです。貴方お一人をそんなにお苦しめしてはすみませんから。ね　お母さん、さうでせう。」

「さうですね。でも智恵子にだけは、一言知らせてからでないと……。」

といふ母の聲は涙にふるへてゐました。

この時次の間との境の襖をさらりと開けて、智恵子が目を眞赤に泣き腫して出て來ました。

「叔父様、兄様お母様、何事も天命でございますわ。どうぞ御心配なく、荷物を引取つて下さいませ。お母様の御機嫌を損じた私が、どんなにお願ひ申上げたとて、どうして藤村家の嫁として置いて頂けませう。

あんなに御親切に、優しく仰有つて頂いたのを、お母様のお慈悲とばかり思つて、有頂天になつて、髪など結つたりして、喜んで歸つて參りました私がお恥しうございます。

叔父様　兄様　お母様、智恵子の愚かさを笑はないで下さいませ。」

智恵子は疊の上に打伏して、人目もかまはず、よゝとばかりすゝり泣くのでした。

悲憤の涙

永い旅行に疲れた、心と體を和やかに憩はせるのを樂しみに、敏郎は我家の閾を跨ぎました。

「お母さん　只今歸りました。」

その聲を聞くと、幾代は部屋から飛出して、

「おゝ　敏郎お歸りかえ。

よく元氣でお歸りだねえ。永い旅行で、しかも人樣をおつれしたんだから、却々大

變だつたでせう。」
「いゝえ、それ程でもありません。
若い青年達と一緒ですから、非常に愉快でした。」
と言ひ乍ら、心の中で、
「何故智恵子は、自分の聲を聞いて、出迎へないだらう。」
と不滿に思ひ乍ら、靴を脱いで上りました。
たけや彌吉も、慌てゝ飛出して來て、
「旦那様、お歸りなさいませ。」
「おゝ　旦那様、お疲れでございませう。」
と心から喜んで迎へました。
しかしまだ智恵子は出て來ません。
敏郎は堪り兼ねて、
「お母さん、智恵子はどうしました？」

と尋ねられると、幾代ははたと詰りましたが、
「智恵子の事については、落着いてからよく話をします。
丁度風呂も沸いてゐるから、入つてお出で。」
と言ひました。敏郎は變に思ひ、
「だつて　うちにゐるんでせう。」
「智恵子はうちにゐないんですよ。」
「それではどうしたのですか。」
「實家へ歸しましたよ。」
「まだ　歸らないのですか。」
「さうだよ。兎に角詳しい話は後でするから、お湯に入つてお出で。
たけや、加減はいゝだらうね。」
敏郎は仕方なく、母に言はれるまゝに、内心智恵子のゐない淋しさに不滿を感じ乍ら、お風呂に入りました。

敏郎はお湯に入つてからも、旅塵に汚れた體を洗はうともせず、ぢつと考へ込みました。

暫く溫まると、そのまゝ上つて、自分の部屋に入つて行きました。

間もなく慌しく茶の間へ出て來ると、聲を彈ませて、

「お母さん、智惠子の荷物はどうしたのです？」

幾代は出來るだけ落着いて、長火鉢に凭り、煙草を煙管に詰め乍ら、

「まあ　敏郎、落着いて、此處へお坐りなさい。」

「だつてお母さん、智惠子の荷物がすつかりなくなつてゐるではありませんか。」

「だからその事について、話があるからお坐りつていふのに。」

幾代は態と威嚴を示して、敏郎を自分と向ひ合つて坐らせました。

「本當にお母さん　どうしたつていふんです。」

「智惠子の荷物は、智惠子と一緒に實家へ引取つて貰ひましたよ。」

敏郎は仰天して、

「何ですつて？　智惠子も荷物も、實家へ歸したんですつて？」

「さうですよ。」

「さうですよつて、一體どうしたつていふのです。

何うしてそんな無茶な事をなさるのです。

私に相談もなしで……。」

「お前に相談すれば、又何の彼のと言つて、難しくなるから、わざとお前の留守の中に、智惠子も荷物も一緒に歸したんだよ。」

敏郎は目の色を變へ、

「お母さん、貴女本氣ですか。

氣でも狂つたのではありませんか。」

「何故　お前はそんな事を言ふのです。

お母さんの何處に異狀があるんです。」

「だつて、今仰有る事が事實だつたら、なさる事も仰有る事も全部普通じやないでは

ありませんか。」

「落着きなさい。親に向つて何といふ言ひ方です。

私の精神に異狀がなければこそ、お前の留守に智惠子を實家へ歸したんです。」

「私の留守に、智惠子も荷物も實家へ歸したといふ理由を聞かせて下さい。

お母さんは、一體何といふ事をなさるのですか。

假令どんな事があつたにしても、夫である私に相談もなく、妻を實家へ歸すなんて、そんな無法な亂暴な話は、何處にだつて聞いた事はありません。」

幾代は屹となつて、

「世間にも例のない程の、處置を親として執らねばならなかつたといふ理由は、お前がよく知つてゐる筈です。」

「何を私が知つてゐるのです。

それは一體何の事なんです。」

「お默り。お前は飽迄私を馬鹿にして、包み隱せるものと思つて、そんな事を言つてゐるだらうが、私は何も彼も知つてゐるんだよ。」

「何の事ですか、それは？」

「お前が白ばくれて、何處迄もそんな事を言ふのなら、私が言つて聞かせませう。

お前幾ら智惠子が氣に入つた家内か知らないけれど、結婚して間もないのに、現在の母親であり、永い間未亡人を通して、藤村家の財産を一文も減らさないで守つて來て、お前に相續させたこの私の許しも受けず、八千圓といふ大金を、何のために智惠子の實家へ貢いだのだえ。

嘘か本當か、有り體の事を言つて聞かせてお呉れ。

何か言ひ譯が立ちますか。」

母にきつぱりさう言はれると、敏郎の顏はさつと變りました。

「言ひ譯は出來ないでせう。

出來ないのが當り前だよ。

お母さんは智惠子の何處が惡いとも思はないけれど、嫁に來て早々から、親に內々

で夫に泣きついて、實家へ大金を引く樣な大膽な怖ろしい、よく世間で言ふ、外面女菩薩、內面女夜叉といふ樣な女を、嫁にしておいて、終ひには先祖代々傳つて來た、藤村家の財產も全部なくなつて終ふ樣な事になつては、御先祖樣にすまないと思つて、色々苦んだ結果決心してお前の留守を幸ひ、智惠子も荷物も、叔父さんに賴んで實家へ歸して貰ひました。」

「叔父さんが返しに行つたんですか。

それで先方では、何も言はずに引取つたんですか。」

「引取るも引取らないも、先方に一言半句も、文句の言へる道理がありますか。

それにこちらは智惠子を先に返しておいて、荷物を送りつけて終つたんだから、受取らないもあつたものじやない。」

敏郎は、はら〳〵と涙を落して、

「お母さん、貴女そんなひどい事をなすつたのですか。

いつの間にお母さんは、そんな殘酷な方になつたのですか。

假令どんな事情があつたにしろ、落着いて話せば分る事です。

そりやお母さんに許しも受けず、御先祖から傳つた身代を、智惠子の實家へ融通した事は惡かつたのです。

その點はお母樣に手を突いてあやまります。

御先祖樣にもお詫びします。

それでも尙御承知が出來なければ、打たれても蹴られても、お母樣の蟲のすむ迄存分にして頂いても、決してお手向ひも、口答へも致しません。」

「今更そんな事をしたとて、何になると思ふの？。

お前は何といふ愚かな人間になつて終つたんだらう。

お母さんは口惜しくて〳〵たまらない。」

と幾代は袖からハンカチを出して涙を拭くのでした。

「お母さん、私が惡かつたのです。堪忍して下さい。

その點はこの通りお詫びします。

しかしその事に就て、智恵子には、決して罪はありません。

實は昨年秋に旅行から歸つて、二人で智恵子の實家へ行つた時、お父さんからの負債のために篠原の家は、家も屋敷も周圍の田畑も、工藤といふ人の所へ取られやうとしたのです。

さういふ窮地へ知らず〳〵飛び込んで行つて、聞くともなくその事情を聞いて終つて、私も驚いて終つたのです。

それに智恵子の兄さんが、勝負事に負けたとか、遊蕩のために負債を作つたといふのなら同情もしませんけれど、お母さんも御承知の通り、あすこは亡くなつたお父さんが義俠心から、澤山の人を救つたゝめに、自分が負債を背負ひ込んで、その責任を果さずに亡くなつたでせう。

だから家も屋敷も田も畑も山林も、大方負債の抵當に入つてゐたんです。

それが今度、銀行が取付を食つて、破產したでせう。

だからその整理のために、預金者の方へ、抵當物を差出して終つたのですから、それで澤山の筆數が、十人以上の人の手に渡つたので、忽ち嚴しい取立を受けたのです。

所が世界戰爭頃に書き入れた抵當物の値段は、今ではその半分も價値がないので、債權者は抵當物を引取つても、元金の半分にも當らないのです。

所があの家屋敷は土藏も二つ付いてゐるし、周圍に八段歩ばかりの田畑があるので、工藤さんの所では、次男を分家させるのに、適當な家屋敷を望んでゐた所、あすこがさう言ふ事情になつてゐる事を聞き込んだものですから、一筆になつてゐたのを幸ひ、渡りに船と金目をかまはず、自分に抱込んで終つたのです。

それでどうしても渡さなければならなくなりました。

兄さんは一旦工藤へ渡して終へば、もう終生取返しがつかないから、是非誰か外の人に一時買取つておいて貰つて、工藤の方の始末をつけ、五年か十年後には、元利共に損をかけない樣にして、買戻させて貰へば、永久あすこから動かないで、佛祭をする事が出來るから、祖先も喜ぶだらうと言つて、色々奔走したさうです。

所が十五年前とは、價格が半分になつてゐるので、どうにも始末が出來ず、萬策盡

きて、家屋敷も田畑も、工藤に引渡すと言つて、悲壯な涙に暮れてゐました。
事情が事情だから、私は見るに見兼ねて、自分から救つて上げやうと言ひ出したのでした。
その時智恵子もお母さんも兄さんも、非常に辛がつて、捨てゝおいて呉れと言つたのですけれど、私としては、知らねば兎に角、現在妻の實家が滅亡するのを見ては、見捨てゝおく事が出來なかつたのです。
だからお母さんにお願ひして、御承諾願はうと思つたのです。
本當にさう思つたのです。」
「思つたつていふけれど、一言半句も相談しなかつたじやないか。」
「その時實に私は苦んだのです。
お母さんに御相談したら、快く許して下さつたでせうか。」
「そんな事、その時でなければ分るものか。」
「ね、お母さん、さうでせう。

お母さんが屹度許して下さるといふ事が分れば、私だつて何うしてお母さんに秘密で、そんな大それた事をしませう。
それに智恵子を貰ふ時、お母さんは篠原の家の事情をよく知つてゐらして、相續者が堅實にしつかりして、負債もなくやつてゐれば結構だが、萬一表面は立派に見えても、内輪に借財などが殘つてゐると、こんな時代だから、何時どんな事情が起つて、親戚へ厄介がかゝらないとも限らないから、さういふ事情さへなければいゝが……。
と仰有つた事を、私はよく覺えてゐます。
だから叔父さんが仲へ入つて下さつて、結婚して後も、永久に物質上には、色々な厄介をかけ合はない樣にといふ樣な條件で、話をつけて下さつたでせう。
それはお母樣の意志だつたと思ひます。
それを知つてゐる私として、若しお母さんにお願ひすれば、それ見た事か。
今からそんな事では、末が案じられるから、智恵子を離緣せよと屹度仰有るに決つてゐると思つたのです。

だから私は考へました。

お母さんに許しも受けず、無斷でお金を融通しては惡いけれど、それかと言つて八千圓といふ金を、五年や十年篠原の方へ融通しておいたとて、こちらが立行かないといふ譯ではないし、それに智惠子の兄さんは、人一倍氣力のある人だから、必ず五年か十年の中には、すつかり元金も利息も揃へて來て呉れるに間違ひないと信じました。

智惠子も一旦うちへ嫁いで來た以上、處女ではありません。

それにあれとしても、假令行屆かぬ乍らも、一生懸命でこの家の家風も覺え、お母さんのお氣にも入り、私にも滿足させる樣にと、涙ぐましい程心を盡してゐるんです。

又近所の人や親戚の評判もそんなに惡くない樣です。

こんな事を言ふと、お母さんは家内に甘いと、私をお叱りになるかも知れませんけれど、若し變な事で、智惠子を離緣でもすると、再び決してあれだけの、忠實な女を嫁として、得られないと思ひます。

少し言葉が過ぎるか知れませんが、いつも私は思つてゐます。

世間の人は妻は家の道具だと申しますが、私はよく家のためを思ひ、親に孝行を盡し祖先の祭事も懇ろに出來て、親戚隣人にも圓滿によく交り、夫の性格趣味その他の總てを呑込んで、眞心から盡して呉れる妻は、家の寶であり、男子の寶だと思つてゐるんです。」

「敏郎　もう澤山だよ。面白くもない。

親の前で、よくそんな身勝手な事が言へたもんだね。

智惠子は家の寶で、お前の寶だから、手離す事は出來ないから、連れ戻して呉れとお言ひなのだらう。

飛んだ寶があつたものだね。

來る早々うちの身代を、在所へ大袈裟に引いて行く樣な女が、うちの寶などゝ、よくもお前は、あの女に欺されたものだね。

私は御免だよ。そんな者を家に入れる事は御先祖樣にすみません。」

敏郎は悲壯な面持で、

「お母さん、これだけ詳しい事情をお話しても、分つて頂けないのですか。
許して頂けないのですか。」
「話だけはよく分つたよ。だが親戚の事情に同情しては一々破産を救つてゐて御覽、
これから何處にどんな問題が起らないとも限らない。
さうすれば篠原を助けてある以上斷る譯には行かなくなるじやないか。
親戚は平等につき合つて行かなくちやならぬ。
これから親戚に五六ヶ所も破産者が出來て御覽。
うちの財産は根こそぎなくなつて終ふよ。」
「だから私は表向きにしないで、誰にも知れない樣に、極秘密に救濟して上げようと
思つたのです。」
「そんな得手勝手な言ひ草が通りますか。
家内の實家なら、秘密で救濟するが、その外の事は表向き知らぬ顏をしてゐるなん
て、そんな蟲のよい事が言つてゐられますか。

それにお前は秘密のつもりか知らぬが、お前が篠原の破産を救つたといふ事は、町
の人も親戚の人もみんなが、私が知つたより先から知つてゐて、えらい噂ださうだ
が、お前はそれを知らないのかい。」
「知れて終へば止むを得ません。
しかし誰がそんな事をふれ出したでせう。」
「隱せば洩れるつていふ事は、昔から譬になつてゐるよ。
天知る地知る、人知る、我知るつていふ通りさ。」
「それも止むを得ません。
それについて彼是言ひ譯はしません。
しかしお母さん、今度の事は、私が絶對に惡かつたのですから、お詫びします。
その代り今後は、天地が假令逆さまになつても、お母樣のお許しを受けずしては、
十圓のお金も、智恵子の實家は勿論外へも融通なんかしません。
これは神かけて誓ひますから、今度の事は許して下さい。

そして智恵子を元通りうちへ入れてやつて下さい。
お願ひします。」
「それは絶對にいけません。
私が一旦決心して處置したものを、今更入れる事は出來ません。
私だつてもう六十の坂を越えました。
この先もう何年生きられます。
私が生きてゐる間の事より、先の事が案じられますから、智恵子は絶對にうちへ入れる事は出來ません。
その代りお母さんが責任を持つて、智恵子より幾倍か優しく聰明な嫁を貰つて、お前に添はせます。」
「お母さん、そんなお話なら止めて下さい。
私は智恵子より外の女を妻として迎へる心持は毛頭ありません。」
「それではお前、一生妻を迎へずに居るつもりかい。」

敏郎の顏は悲壯に痙攣し、目は涙のために光りました。
「お母さん貴女がそれ迄に仰有るのなら、もうよろしい。
私にも決心があります。」
その聲を聞くと、幾代は不安氣に、我が子の顏をじつと見凝めて、
「決心するつて？　どう決心するのです。」
「何も仰有らないで下さい。今日迄可愛がつて育てゝ頂いた御恩は、海山よりも高く深く、有り難いのですけれど、今度お母さんの取られました處置は我が子である私の人間として生きる、生命の總てを奪つて、奈落の底へぶち込まうとなさるに等しいのです。
誠の親の慈悲といふのもは、そんなものでせうか。
私は少し一人で考へて來ます。」
敏郎はさう言つて、つと立ちました。
幾代は驚いて、

「敏郎お前何處へ行くんです。」
「何處へ行くつて、自分でも分りません。ぢつとしてゐられないんです。」
「お待ち。お待ちつたら。
まだ話があるんだよ。」
「いゝえ、もう結構です。」
敏郎が母の涙聲で止めるのを振切つて、土間に下りた時、いきなり潛り戸がからり
と開いて、
「御免下さい。」
と入つて來た人があります。
敏郎はその人を見ると驚いて、
「おゝ　月ケ瀬の兄さんですか。」
と叫びました。

復　緣

「何も彼も敏郎さんから聞いて下さいました事でせうから、私からは何も申上ませんが、唯私として遺憾に存じますのは、何故敏郎さんから、融通してやらうと仰有いました時、きつぱりと御辭退する勇氣が出なかつたかといふ事です。
全く取返しのつかぬ事をしたと後悔して居ります。
しかし今更そんな事を申しました所で、何の役にも立ちませんから、過去の事はさらりと水に流して頂いて、改めてお願ひし度い事があつて參りました。
と申しますのは、外ではございませんが、先達御融通頂きました、八千圓のお金は、
そのまゝ持參致しましたから、妹はどうぞ元通りに、こちら樣へ歸らせて頂き度いと存じまして、上りました次第でございます。

敏郎さん、お金はこの通り持つて參りました。」
敏郎は驚いて、
「兄さん、どうしてそんな事をなさるのですか。」
「まあ、何も仰有らないで、一寸お調べ下さつてお受取り下さい。
そして私の一生に一度のお願ひですから、どうぞ妹を復縁させてやつて下さい。
お母様どうぞお願ひ致します。」
幾代は困惑した様な顔で、
「一旦あゝして引取つて頂いた事ですから……。」
「御尤もでございます。
お母様のお心持はよく分つて居ります。
しかし私も男子として、自分の生氣地なさのために、たつた一人の可愛いゝ妹の、
終生の幸福を損ひ度くございません。
ですから決心して參りました。

お宅様と私の家の資産狀態は、全く現在では、お月様とすつぽん程違つてゐます。
釣合はぬは不縁の原因といふ事は、聞いてゐますが、縁あつて一旦貰つて頂きましたからは、智惠子はこちら様の嫁でございます。
智惠子の日常の行に、至らぬ點があつて、御離縁といふのなら、又別でございますが、うちの破産が禍して、離縁されるなんていふ事は、全く妹が可愛さうでございます。
あれには全く何の罪も科もないのでございます。
妹は離縁になつたからは、仕方がないから髪を下して尼になつて、一生浮世離れた生活するなどと、可哀さうな事を言つて、母を泣かせてゐますので、兄として私は見てはゐられませんので、七重の膝を八重に折つてでも、お願ひして復縁して頂ける様お願ひしてやると言つて出て來ました。
その代り智惠子を復縁して頂く事につきましては、私の方から條件をつけます。」
幾代は訝し氣に、

「どんな條件をそちらからおつけになると仰有るのですか。」
と苦笑しました。
「外ではありません。
智恵子を復縁させて頂きました以後は、お宅様と私共とは、絶交して頂きまして、一切親戚のおつき合ひをして頂かない様にといふ事です。」
敏郎は吃驚して、
「兄さん、何を仰有るのです。」
「いや　私は眞劍です。私はまだ若いのですから、一奮發して、成功するつもりで居ります。
そしてお宅様と、同等位の財産が出來て、世間から見て、引け目のない地位を得ました時は、改めて親戚づき合ひをして頂く様に、私の方からお願ひに出ます。
それ迄は智恵子を、實家として私の方へ遊びに歸して頂く必要はございません。
私の方と致しましても、母も私も絶對に、お宅の閾を跨がないといふ、條件をつけ

てお願ひ致します。」
敏郎は義兄の決心と申出でに、感極つて、ハラ〳〵と涙をこぼしました。
幾代も今はどうにもかうにも拒み兼ねて、
「そんな事迄仰有らなくてもいゝですよ。
それ迄に貴方が決心してお出で下さつたのなら、兎に角智恵子を戻して頂きませう。」
敏郎は母の言葉を聞くと、
「お母さん、有りがたう。
では連れ戻してやつて頂けますか。」
「有りがたうございます。それで私も決心して參りました甲斐がございます。
では早速妹を伴れて參ります。」
それを聞くと、幾代は
「智恵子も來てゐるんですか。」
「一緒に來て、表に待たせてあります。」

「さうでしたか。では連れて入つて下さればよかつたのに。」
「しかしお願ひ出來るかどうか分りませんでしたので……。」
「表で永く立つてゐて、さぞ寒かつたでせう。
すぐにつれて來てやつて下さい。」
幾代の言葉に好雄は、心嬉し氣に、
「ありがたうございます。では入れてやつて頂きます。」
と立上りかけましたが、改めて坐り直して、
「あの荷物も、御迷惑乍ら、今晩受取つて頂き度うございますが。」
幾代は目を瞠つて、
「おや、荷物もお持ち下すつたのですか。」
「序でございましたから運ばせました。」
「さうでございましたか。では運び込んで頂きませう。」
敏郎は嬉しさの餘り、

「兄さん　色々御心配かけてすみませんでした。
實は今夜、歸つて母から委細の事を聞いて、途方に暮れてゐた所でした。」
「私も實は貴方がお歸りになつてから、お話合ひなごしますと、又何でもない事にお母様の誤解を受けては、將來の圓滿を缺くと思ひましたので、貴方が今日歸つてゐらつしやる事をよく聞糺し、お歸りになつたといふ事を突止めてお伺ひした譯でした。」
「それはよくお氣がついて下さいました。
本當に色々御迷惑をかけまして恐れ入りました。」
軈て智恵子は兄に伴れて、家の中へ入つて來ました。
苦勞したゝめか、僅か十日ばかりの間に、體や顏が目に立つ程痩せて、一層顏立が整つて、天女の樣に氣高く見えます。
座敷に入ると、愼しやかに手を突いて、
「お母樣、私が不束なばかりに、色々御心配かけましてすみません。」
幾代はすつかり機嫌が直つて、

「よく歸つてお呉れた。私もお前の知つての通り、一こくものだから、前後も考へずあんな事をして、お前やお母さんや兄さんにも、大變心配かけてすまなかつた。」

「いゝえ、勿體ないお母様、みんな私が至りません爲でございます。今後はどうぞ、行屆きません事は、御遠慮なくお叱り下さいます樣に。御面倒でもよろしくお願ひ致します。」

と挨拶すると、初めて敏郎に向つて、漸く

「貴方、御心配かけましてすみませんでした。」

と言つたまゝ、後は疊に打伏して、さめ〴〵と泣くのでした。

敏郎も好雄も、感慨無量の思ひで、俯向いたまゝ、默つてゐました。

密談

休暇でもないのに、好美が病氣靜養だといふふれ込みで、突然歸つて來ました。

だが一向病氣らしくもなく、靜かに寢てゐるでもなく、藥一服呑むでもなく、醫者を迎へるでもなしに、我儘を言つて、ぶら〳〵と遊んでゐました。

時々けば〳〵しい衣裳を着て、遊びに行くと告げて出て行くのは決つて平井の叔父の家でした。

しかし時々、この地方の人とも思はれない樣な、輕薄らしい青年と町を歩いてゐたのを見た人が、あるといふ噂さへ立ちました。

好美が歸つてから、どうした事か、母の幾代も、時々自分の實家の平井へ遊びに出かけます。

又平井の叔父も、何の彼のと言つてやつて來ては、幾代の部屋で、炬燵に溫もり乍ら、ひそ〳〵と話してゐる事が多くなりました。

今日も勇藏が遊びに來て、幾代の部屋で頻りに話込んでゐました。

用事のために敏郎は、外へ出て行つて居りませんでしたが、智惠子はまめやかに家の事を何くれとし乍ら、時々お茶やお菓子などを、母の部屋へ運んで參ります。

と好美が、
「嫂様、お茶が欲しければ、私取りに行くから、かまはないで頂戴。」
優しく言へば、何でもない普通の言葉も、意氣惡く言へば角立つて聞えます。
だが智惠子は優しく受けて、
「氣がつかなくて、失禮してゐますけれど、好美様よろしくお願ひ致します。」
と淑かにお勝手の方へ退つて參りました。
臺所へ來て見ると、ぢいやと、たけやが、誰もゐないと思つて、いゝ氣になつて、
「あの　我儘娘　何だつて今頃うちへ來たんだらうね。」
「本當だ。まさか大事な學校迄休んで、優しい奥様を虐めに來た譯でもあるまいが……。」
「あの　言葉つきや、する事なす事の意地の惡さはどうだね。
あれでよい出來だと、御隱居様は、思つてお出でになるんだらうか。」
「自分の子になると、可愛さ餘つて、目に入れても痛くない位ださうだから、惡い所

なんて、皆目分らないで、いゝ娘だと思つて見えるんだらうよ。」
「さうだらうか。呆れたものだよ全く。
親なら一口位叱言を言つてもよさゝうなものだのに。」
二人が餘り聲高になつたので、智惠子は驚いて、
「そんな所で、大きな聲をして、人様の噂などしちやいけませんよ。
聞えたら大變じやありませんか。」
「あら　奥様、そこに見えたのですか。
誰も見えないと思つたものですから、つい二人で勝手な事を言つてゐました。」
「少し氣をつけて呉れなくちや困りますわ。
知れたら私迄叱られますからね。」
「本當に　奥様の手落が、何かあつたらと、そればかり御隱居様も、お嬢様も、鵜の目鷹の目で見えるんだから……。」
「そんな事言つちやいけませんといふのに。本當に聞えますよ。」

「はい〳〵今度から氣をつけます。
だが奥様が餘りお氣の毒で、私は見てゐられませんのだ。」
「私だつて腹が立つんですよ。
歴とした奥様を、下女か何かの様にこき使つたり、意地の悪い事ばかりして……。
私が奥様だつたら、日に一遍位は言ひ返してやりますよ。
それが厭だつたら、旦那様に言ひつけて、叱つて貰ひますよ。
それだのに奥様は餘り、お優し過ぎるので、私は歯痒くて〳〵たまらないんですよ。」
「さ　さ　もういゝから默つて、
私が何も彼も行屆かないからですよ。
誰も惡い人なんかありません。」
「奥様の様に考へてゐりや、爭ひなんてものは、全く出來ないんだが、當り前の人間じや眞似の出來ない事だ。」

と言ひ乍ら、ぢいやは菜を取りに行くと言つて、びくを提げて、裏門から出て行きました。
おたけはやりかけた洗濯をさつさと片付けにかゝりました。
智惠子は先刻始めておいた張り物をしやうと、裏庭へ出て行きました。
それを見るとおたけは、何を思つたか、しかけた洗濯の手を止めて、足音を忍ばせて、座敷へ上ると、幾代の部屋の後に通じた廊下をそつと進んで隣の部屋へ入つて行きました。
そしてそこにかけてあつた着物の蔭に身を忍ばせました。

壁に耳

障子一重中では、それと知るや知らずや、好美が、

「秀子さんを貰へば、仕立はこちらで望むだけするわ。
十釣でも二十釣でも……。その上十萬圓土産として、そつくり持つて來るんですもの。
考へても御覽なさい、大學卒業で、綴標がよくて、釣物はどれだけでも持つて來て、その上十萬圓ものお土産を持つて來るつていふんですもの。
大した事じやありませんか。
お兄樣だつて、今は嫂さんに夢中になつてるけど、離緣して終つて、すぐに秀子さんに來て貰へば、すつかり心が變つて、圓滿にやれると思ふわ。」
今度は母の幾代の聲で、
「好美、お前そんなうまい事を言ふけれど、秀子さんは、仕立も充分した上で、十萬圓も土産を持つて來るなんて、本當かえ。」
「お母さんてば、まだ疑つてゐるのね。
鮎川さんとこは、五百萬長者よ。

十萬圓ばかりのお金、小遣に持つて來るの、當り前じやありませんか。」
今度は勇藏の聲で、
「本當だつたら、豪勢なものだなあ、
秀子さんといふと、この正月遊びに來た、あの素晴らしい派手な衣裳を着、キラキラ光る指輪を幾つもはめてゐた娘だらう。」
「さう、叔父さん、素敵でせう。
あの人五百萬長者の令嬢よ。」
「何だか知らぬが、着物なんかも、赤ん坊の着る樣な派手な着物を着て、頭もお前の樣に、ちり〳〵にして、顏も眞白にお白粉つけたり、頬べたと唇を眞赤にして、目ばかりくり〳〵させてゐたぞ。
あれが東京じや美人といふのか知らぬが、正直な事を言ふと、私はどちらが美しいかつて聞かれりや、倍も三倍も、智惠子が美しいつて、言ひ度くなるよ。
智惠子は第一顏が瓜實顏だ、口元が引緊つて、色白で目がとても可愛い〻。

そして第一髪が素直で黒いから、丸髷に結つて薄化粧して、一寸着物を更へるとふるひつく程美しいんだ。

この町なんかじや、智恵子と竝ぶ嫁御なんて一寸ないぞ。

それに心が優しく素直だから、敏郎の氣に入つてるのも、無理はないと思ふ。

俺等だつて若くて、あんな女を家内に貰へば、命がけで可愛がるだらうよ。」

「叔父さんは、何言つてるんです。

あんな人を本氣で賞める樣なら、叔父さんどうかしてるのよ。

田舍染みて、野莫臭くその癖いつも、人の氣ばかり引いて、甘へてゐる樣な人、現代の女性じやないわ。

秀子さんなんかと、竝べて比較など出來るものですか。」

「お前は又、えらい秀子さん贔負だね。」

幾代は笑つて、

「人の顏形なんていふものは、好き不好きだから、一概にかうだと決める事は出來ないものだよ。

そんな事はいゝとしても、此の頃聞いた事だが智恵子の兄さんは、私に面當てか知らぬが、家屋敷や全部の財産を賣拂つて、今度南米へ行くといふ事だ。

さうするとお母さん一人が殘る事になるだらうが、どうするつもりか知ら？

ごつちにしたつて、一旦敏郎が鹽梅よく救つたのを、兄が意地張りで金を返して、家屋敷迄賣拂つて、代々續いた篠原家を、斷絶させる以上、幾ら天命だとか運命だとか、口で體裁よく言つてゐても、矢張り智恵子もお母さんも兄さんも、私を怨むに決つてゐる。

その事を思ふと、どうしても私は、智恵子を嫁にしておき度くないと思ふから、敏郎の心さえ、しつかり摑んで吳れる程の嫁が見付かりさへすれば、今日にも私は離縁し度いと思つてゐるんだよ。」

「だからお母樣。いゝじやありませんか。

秀子さんを貰ふ事にお決めなさいつてば。」

「だけどお前、本當かどうか分らないし……」
「本當よお母様、秀子さんはお兄様にとても一生懸命になつてゐるんですもの、それにお父さんお母さんが、とても秀子さんに甘いんだから、どんな事だつて秀子さんの言ふ事なら、喜んで承知するんです。
だからお母様の胸一つよ。」
「だが　先方はさうにしても、敏郎が承知しなきや、駄目じやないか。
この前の事で、大概分つてゐるじやないか。」
幾代は笑つて、
「この前の時は、餘程うまく處置したつもりだつたが、私に淺墓な所があつたから失敗したけれど、今度は經驗が積んだから、智惠子をこの家から出すとなれば、表向あゝいふ事をせずに、何でも彼でも、出て行かなけりやならない樣に、仕向けて追ひ出しますよ。」
「餘り感心しない量見だなあ。」

勇藏はさう言つて笑ひました。
「だつて叔父樣、藤村家の身代には代えられないでせう、それこそ重大な事ですもの。
叔父樣、貴方この話に本氣で力を入れて下さいよ。
親身の叔父さんじやないこと？
その代りこの話が成立したら、秀子さんが持つて來るといふお金の中から、一萬圓だけ屹度叔父樣に差上げるわ。
だつてこの頃、相場に手を出して、損して大分困つてゐるつていふじやない。」
勇藏は慌てゝ、
「何？　何だつて、誰がそんな事を言つたんだ。」
「駄目よ　叔父さん。
ちやんと知つてるんだから……。本音をお吐きなさいよ。
そして求めないのに、こんな旨い話が向ふから飛んで來て、一萬圓もの寶が入り込

むつていふんですもの。
それこそ濡手で粟どころの騒ぎじやない、棚から牡丹餅そつくりよ。」
「お前はどうしてそんなに口が達者になつたんだ。」
「大きなお世話。それより今の話の事どう？」
「待て〳〵　眉に唾つけてから返事をするから……。」
「まあ　憎らしい。　叔父様つたら、　私が出鱈目な事を言つてると思つてゐるのだわね。」
「だつてお前、話が餘り旨すぎるから、本當にし度くも出來ないじやないか。」
好美は眞面目になつて、
「叔父様、本氣になつて頂戴、この話だけは眞面目よ。
決して叔父様を欺したりなんかしないんだから……。」
「正眞正銘の話だつたら、私も眞面目で考へてもいゝよ。」
「ね　お願ひするわ。力になつて頂戴。

この話が成立すると、幸福になる人が澤山あるんだから……。」
「でも智恵さんが可哀さうだからなあ。」
「一方に澤山幸福な人が出來れば、一人位不幸な人が出來たつて仕方がないわ。」

心の刄

怖ろしい好美は、間もなく歸つて行つたけど、復緣して當分の間は、前にも增して優しかつた母の幾代がどうしたものか、又毎日智恵子に辛く當り初め、事毎に叱言を竝べて、傍の見る目も耐えられない有樣でした。
敏郎は始終それを、見たり聞いたりするので、智恵子が可哀さうだと思ふけれど、本人の智恵子が、一言半句もそれを訴へもせず、母が酷く扱ふ程、一層優しく、朝もいよ〳〵早く起きて、座敷の事お勝手の事、祖先の祭事など、何くれとなく身を惜し

まず働くので、心の中でのみ深く劬つてゐました。
誰が見ても、智恵子に一點の非難の打ち所もないのに、母はいよ〳〵智恵子を惡く罵ります。
智恵子からは何も訴へないが、此の頃では女中のたけが敏郎に、
「旦那様、奥様が餘りお可哀さうですから、少し氣をつけてお上げになつて下さいませ。」
「おたけ何の事だ。それは？」
「だつて御隱居様が餘りです。
奥様が本當にお惡いのなら、御尤もだと思ひますけれど、奥様が奇麗に洗濯してお干になつたものへ、わざと汚いものや墨などをおつけになつて、
「こんな洗濯のしやうがあるか。」
などとお叱りになるのでございます。
奥様がお茶をお上げになると、少しぬるければ、こんなぬるいお茶だとか、少し熱

ければ口を燒く様だなどと、旦那様がお留守の時は、叱言の仰有り通しでございます。
どうして御隱居様は、奥様のなさる事が、あんなにお氣に召さないのでございませう。」
「私のゐない時には、そんなにお母様が叱言を仰有るかい。」
「それはもうとてもひどくて、傍で見てゐられません。」
「そんな時智恵子はどうしてゐる？」
「唯すみません。行屆きませんで、申譯ありません。
とお詫びばかり仰有つてでございますよ。
私達が見兼ねて、御隱居様もあんまりだなどと申しますと、却つて私共が叱られますの。」
「何と言つて叱るんだ？」
「奥様はいつも「私」が行屆かないから、お母様が御親切に敎へて下さるのです。
それをお小言だなんて思ふのは、お前が間違つてゐると仰有いまして……。」

「智恵子がさう言つてゐるんなら、それでいゝじやないか。
お前達は自分の仕事さへ、よくしてゐれば、お母さんや智恵子の事などについては、色々言つて呉れない方がいゝんだよ。
お互に人には立場といふものがあるからね。」
とその場は體裁よく宥めて、下女のおたけの口は止めましたが、敏郎の心は決して穏かではありませんでした。
今日も敏郎は用事があつて、朝からゐないのです。
幾代は自分の部屋から、智恵子を呼びました。
「智恵子、用事がすんだら、一寸こゝ迄來てお呉れ。」
「はい　畏りました。
お母様何御用でございますか。」
「一寸　其處へ坐つてお呉れ。
お前に一寸話し度い事があるから……。」

今日は又改つて、どんな事を言はれるのかと、心配し乍ら姑の傍に坐ると、
「智恵子、外ではないが、　私はお前に一ぺんうちへ歸つて貰つたけれど、　兄さんが強つてと言つて、荷物迄持つて、お前を送つて來て下さつたので、斷る事もならず、そのまゝうちにゐて貰つたのだけれど……。
お立替へしたお金は、返して貰つた貰はぬに拘らず、私はお前を一生敏郎の嫁にしておくといふ心持になれないんだよ。」
智恵子は悲し氣に、母を見上げて、
「まあ　お母様、　私に何か思召に叶はない事がございませうか。」
と聞きました。
「何處がいゝとか惡いとかいふ事はなく、お前のする事なす事言ふ事、全部が私の氣に入らないんだ。
だから私は此の頃つく〳〵考へてゐるんだが……。
敏郎とお前とは、夫婦仲がいゝのだから、どうしても別れられない。

そしてお前もどうしてもこの家を出て行く事が厭だと思ふのなら、私が在所へ歸らせて貰はうかと思つて、この間から何遍も在所へ行つて、甥や嫁にも話したり弟にも來て貰つて話したんだ。

するとそんな事情なら、止むを得ぬから、この藤村家としては逆縁で、世間の物笑ひになるだらうが、それも仕方がないから、引取つて呉れるといふのだ。

だから私は在所へ歸らうかと思ふんだがね。

私もこの年になつて、こんな苦勞をする位なら、自分で命を縮めるか、在所へ行つて厄介になるより外仕方がないからね。」

「まあ　お母様……　そんな事。

そんなに私がお氣に召さないで、お母様に御苦勞かけますなら、私が歸らせて頂きます。」

「そんな事を言つて、又お前は敏郎に言ひつけて、散々私を虐めさせやうと思ふのだらう。」

「まあ　お母様。どうして私そんな事……

どうぞお母様、そんな事お思ひになりませんで……。

いつまでもこの藤村家をお守り下さいませ。それだけでなく、敏郎さんや好美様に取つて、かけがへのない、お一人のお母様です。

私故にお在所へお歸りになるとか、お命が縮め度いなどと、伺ふだけでも悲しい事でございます。

私決心致します。決して敏郎さんには、何とも申上げませず、身を退かせて頂きますから、今暫くの間、御猶豫下さいませ。」

と心を引緊めて誓ひましたけれど、餘りの辛さ悲しさ遣瀬なさに、胸が破れる樣に感じましたので、

「お母様　御免遊ばせ。」

と我が部屋へ歸ると、袂を口に當てゝ、聲を忍んでひた泣きに泣きました。

傷心

惠智子は幾代から、餘りにも酷いそれこそ死の宣告を受けたより辛い言葉を聞かされて、驚きと悲しみに、喪心せんばかりになつて我が部屋へ歸り、聲を忍んで泣き續けてゐました。

敏郎と結婚して、密月の旅へ出た頃は、行く先々の山水の眺めも、海の景色も月も星も限りなく清く美しく、人の人情も噎せる程溫く感じられて、世界中の幸福を一身に集めた樣なと、二人で幾度も微笑み合ひ感謝し合つたのでしたのに、それも瞬く暇に夢と消え、僅か半年も過ぎるか過ぎないのに、何といふ苛酷な運命が我身の上に訪れた事だらう。

自分が荷物と共に實家へ歸された時、母も兄も聲を忍んで泣いた、その時の自分の

悲しみが、今でもまざ〳〵と目の前に浮んで來る。

兄はあゝした氣象だから、あゝした決心をして、自分が泣いて止めるのも聞かずに、全財產を我から進んで、工藤さんに引受けて貰つて、八千圓のお金を、そのまゝそつくりこの家へ歸して、私を荷物と一緒に送り屆けて下さつた。

その時兄はお母樣に、今後自分が何處かで成功して、藤村の家と同等の財產を得る迄は、親戚としてつき合つて貰はない事を條件としてお願ひするから、復緣させてやつて頂き度い。

かうしてお願ひするからは、今後は母も自分も、決して、親らしい、又兄らしい顏をして、こちら樣へ出入りは致しません。

とあの負け嫌ひな兄が、疊に額を擦りつけて賴んで下さつた。

お母樣からそんなに迄言はれるのだつたら、兎に角智惠子も荷物もおいて歸つて下さい。

と言はれた時、兄は非常に喜んで、

「これで安心しました。母もどんなに喜びます事でせう。」
と瞬いた目から、溢れ落ちた涙を、どうして忘れられやう。
私のために、兄は出來ない忍耐をして、詫びて下さつたのだ。
只管頼んで下さつたのだ。兄はどんなに辛かつた事だらう。
唯一人の妹の私が可愛いゝばかりに、その後間もなくお母様を茂戸の叔父の所へ預けておいて、遠い南米へ行つて終はれたのだ。
その時だつて、公然と逢ひに來て呉れたのではなかつた。
敏郎さんの計らひで、こつそりと氏神様の森迄、伴れて行つて下さつて、其處で別れをしたんだ。兄は言はれた。
智惠子、決して悲しむじやない。泣くじやない。
かうなるのは、みんな天命なのだ。
世の譬へに、いつまでも有ると思ふな親と金、ないと思ふな運と借金。
といふ事がある。

村の人も親戚も、十代も續いた篠原の家が潰れるのは、如何にも惜しいといふ。
お母さんにもお前にも嘆きをかけて、本人の私だつて、責任者だけに、一層苦しくもあり、悲しくもあるんだよ。
だけどよく考へて見れば、御祖先から傳つた大切な財産だとは言ふけれど、千年萬年溯つて、前の祖先を調べたとて、この世の水一滴土一塊りも、自分の力で作つたものはない。
唯自己名義の所有權を有する事を以て、自分の物と思ひ、大切に傳へて來ただけだ。
それが永い間に色々の事情があつて、所有權は殖えたり減つたりして動いたとしても、結局はこの世に殖えも減りもしない天恩物だ。
それが、相續者の私の代になつて、支配が出來なくて、身代全部を人手に渡さねばならぬのも、これ迄の因縁で、篠原家が無一物になる時が來たゞけの事だ。
家屋敷を人手に渡して終つても、祖先の魂と血と肉を受けた私が生きてゐるからは、篠原家が斷絶したといふ譯ではない。

私は若い青年時代から、海外發展を頻りに夢みてゐたが、かうした事情でよい動機を得た事を喜んで、海外へ乘出す事にした。

行先は南米だが、何處に落付くのか、今の所分らないが、決して心配するな。

祖先から受けた、全財産は失つたが、何物にも代へられない、健全なこの體と腕と魂を持つてゐる。

これを資本に、大いに海外で奮發して、お前やお母さんが吃驚する程の成功を、必ず仕遂げて歸つて來る。

その時は正面から、藤村さんの所へも御挨拶に伺ふよ。

決してそんなに永い事じやないから、どんなに辛くとも辛抱して、飽迄藤村さんの嫁として、人に恥づかしくないだけの務めをして呉れ。

實家がなくなつたお前は、世間へも親戚へも、肩身が狹くて辛からう。

それを思ふと可哀さうだけれど、一番力に思ふ敏郎さんが、何も彼も理解して、お前を可愛がつて下さるのを知つてゐるだけに、私は決して心配はしない。

飽迄お母様に孝行して、敏郎さんのためにも、有りつ丈の力を盡して、妻としての本分に缺ける所がない樣にして、仕合せに暮してゐて呉れ。

今度逢ふ時は、可愛い幾人かの子供の顏が見せて貰へる事だらう。

私はそれを樂しみに、海を越えて遠くへ行つて來る。

何分にも遠い〳〵地球の端へ行くのだから、餘り便りもしないかも分らぬ。

唯心にかゝるのは、お母さんの事だ。

親戚だ肉身だとは言つても、たまにお客に行つたのと違つて、永い月日厄介になつてゐる中には、お互に言ひ度くない事を言つたり、見度くない事、聞き度くない事を見聞きする事もあるものだ。

年老いたお母さんにそんな事のために、悲しい思ひをさせる事は、子として本當に辛いと思ふけれど、さうかと言つて、こんな住み馴れた結構な日本の國を後に、先の知れぬ外國などへ、つれて行くといふ事も出來ないし、又行くとも言はれないのだから、俺は涙を呑んで、茂戸へ賴んだのだよ。

男の意地で、母も俺も出入りしないと、お母様にお誓ひしたからは、今更母がどんなに淋しい時でも、お前に逢ひに來る事は出來ないんだから、その心持を察して何とか都合のよい時は、假令一年に一ぺんでも、敏郎さんにお願ひして、お母さんに逢つて、心を慰めて上げてお呉れ。

それだけの事が頼んで置き度いばかりに、頼んで逢はせて頂いたんだから、と言つて、兄は男泣きに泣いた。

自分も涙の涸れる程泣いたけれど、可弱い女の身でどうする事も出來ない。

兄が悲壯な胸の痛みを包んで、遙か浪路を越えて、南米迄も行くといふのに、港迄も見送る事が出來なかつた。

私は何といふ不幸な身の上だらう。

その後どうしてゐるかと、案じてゐる、戀しい懐しいお母様にも、敏郎さんの情で、二三度逢はせて頂いたけれど、逢ふ度に、物淋しさの爲にか、目に見えて老ひ込んで行かれるのがはつきり分る。

それを思ふと、この胸は張り裂ける様で、先立つものは涙ばかりだ。

お母さんは、いつも何氣なく、心配するな智恵子、私は何の苦勞もなく、氣樂に暮してゐると言はれるけれど、親戚だとは言つても、他家に寄人になつてゐて、どうして眞から氣樂な事があらう。

あゝ お母さんの事が思はれる。

私はこんな事をしてはゐられない。

と胸を焦らせても、藤村家に嫁いだ身であり、假令お母様がお氣に召さぬと仰有つても、敏郎さんの身に餘る情を思へば、どうして今頃夫の愛に背いて、母の許へ走られよう。それを思ふばかりに、今日迄どんなにお母様から叱られても、罵られても、ぢつと堪えて來たのだ。

けれども今日のお母様の仰有つた事は、何といふ悲しい、無慈悲なお言葉だらう。

あれがお母様の本當のお心持だらう

「お前がこの家を去つて行かねば、私が實家へ歸る。

お前と一緒にこの先、同じこの家で暮さねばならないなら、命を斷ち度いと迄仰有つた。あゝ怖ろしい、何といふ酷い言葉でせう。

お母様には私の姿が心が、鬼か夜叉にお見えになるのだらうか。

何のために私はお母様から、こんなにお憎しみを受けねばならないのでせう。

寢ても覺めても、どんなにしたら、お母様のお氣に入るかと、その事ばかりに、一生懸命で心を盡してゐるのに、する事なす事の總てが逆になつては、御機嫌を損じてばかりゐる……。

あゝ　私はどうしたらいゝのでせう。

お母様には、よい時機迄待つて頂けば、自分の身の處置だけは、自分一人でつけますからと、お誓ひはしたけれど、あんなに愛してゐて下さる敏郎さんに、無斷でこの家を出て行くなんて、そんな事が私に出來るでせうか。

その日からその時から、愛する敏郎さんを、淋しい悲しい、不幸な人にする事を知つてゐて、無斷でこの家を出て行つていゝでせうか。

こゝ迄考へて來ると、全く我が身の處置に迷つて、このまゝ我が身が消えてなくなつて呉れゝばよいといふ樣な心持になると、最早涙も盡きたのか、出て來なくなつて終ひました。

この時後から、そつと忍び寄る、人の氣配がしました。

主從の情

智惠子がはつとして振仰ぐと、

「奥樣、こゝにゐらつしやいましたの？」

「まあ　たけだつたの？　何か用なの？」

たけはそつと膝を進めて、

「奥樣御隱居樣は、外へ出て行かれて、お部屋に見えませんの。

だから安心してこつそり伺ひましたわ。」
「さう、お母様は外へお出かけになつたの？」
たけは口惜しさうな、顔をして目に一杯涙ぐんで、
「御隠居様は、先刻に奥様をさん〳〵虐めておいて、奥様がこちらへお出でになるとしやあ〳〵として、外へお出かけになりました。
大方お實家へゐらしたのでせう。
何だつて御隠居様は、あんなに奥様にお辛く當るのでせう。
此の頃の御隠居様の仰有る事、なさる事は、全く鬼か夜叉でなければ、出來ない様な事ばかりでございますわ。」
「まあ　たけ、お前又そんなひどい事を言つてはいけません。
お母様がお悪いのではない。
みんな私が行屆かないからの事ではないか。」
おたけは下唇をきつと嚙んで、

「奥様、今日は奥様が何と仰有つても信じません。
奥様はおかくしになつてお出でになるけれど、御隠居様は今日奥様に、お前がこの家を出て行かなけりや、實家へ歸る。
お前と一緒にこれから後、暮さねばならぬのだつたら、命を斷つと言つて、奥様を脅されたではございませんか。
幾らこの世が廣いと言つても、そんな怖ろしい事を言つて、嫁を虐める姑様が、この世にありませうか。」
「まあ　たけや、お前そんなつまらない事を言つてはいけません。」
「だつて奥様、私悪いとは思ひましたけれど、御隠居様が奥様をお呼びになる聲が毒を含んでゐましたので、今日はいつもより一層ひどいと思ひましたので、お庭の外でみんな聞いて居りました。」
智恵子は吃驚して、
「まあ　お前立聞きをしたんですか。」

「御免下さいませ。惡氣で立聞き致しました譯ではございませんけれど……。」
「聞いて終つたのなら仕方がないけれど、決してこれからは、人の話を立聞くなんて、さもしい心を出しちやいけませんよ。」
「はい、これからは決してそんな事をしない樣に氣をつけます。」
智惠子は悲し氣に、
「たけ、お前何も彼も聞いて終つたのなら、今更隱したつて仕方がないけれど、私はどうしてこんなにお母樣から、お憎しみを受けるのだらう。
どんなにしたら御機嫌を取る事が出來るでせう。」
たけはこゝだとばかり膝を乘り出して、
「奥樣、貴女は餘り、お心がお美し過ぎて、自分が惡いんだ、行屆かないんだとばかりお思ひになつてゐらつしやいますから駄目なんでございますよ。
御隱居樣がいつも奥樣に、他で聞いても見てもゐられない程、ひどくなすつたり、今日の樣な怖ろしい事を仰有つて、奥樣に針の莚へお坐りになる樣にお仕向けになるのは、御隱居樣に恐ろしいたくらみがお有りになるからでございますよ。」
智惠子はぎよつとして。
「お母樣におたくらみがお有りになるんですつて？
一體それは何の事ですの？」
「そら御覽遊ばせ。貴女は何も御承知がないではございませんか。」
「それは一體何の事なのです？」
「奥樣が餘りお氣の毒だから、私申上ますけれど、決して御油斷なすつてはいけませんわ。
あのね　奥樣、奥樣は何も御承知がないのですけれど、御隱居樣とお孃樣と、平井の旦那樣と、三人が心を合せて、奥樣を御離緣なさるたくらみをしてゐらつしやるのでございますよ。」
「まあ、本當なの？　お前そんな事、何處で聞き出したの？」
「何處でつて、私人から又聞きしたのでも、敎へられたのでもございませんの。

現在直接この耳で、三人で密談して見えるのを聞いたのでございます。」
智恵子は呆れて、
「まあ　お前つたら、立聞きする事が上手なのね。」
「だつて　奥様、自然そんな風な廻り合せになるのですもの、仕方がございませんわ。」
「それでどんな様なお話を聞いたの？」
「私お話するのも怖い様で、まだぢいやさんにも話してないんでございますけれど、奥様だけに申上げますわ。」
そのお話はかうなのでございますよ。
奥様を御離縁しておいて、お正月に東京から遊びにゐらした、お嬢様のお友達だといふ、あの西洋人形の様な娘さんを、その後へお嫁さんにお貰ひになるんですつて。」
智恵子は尠からず驚いて、
「あの　お正月にゐらした、好美様のお友達の、鮎川様と仰有る方ですの？」
「さう〳〵　あの方でございますよ。

お嬢様の仰有るのには、あの方がこちらの旦那様にお目にかゝつて、とても好きになつたんですつて。
だから奥様を御離縁して、その後へ秀子さんを貰つて下さると、奥様以上に旦那様を大切になさるんですつて？」
「そんな事を仰有つて？」
「それだけではございません。
本當に奥様が御離縁になつて、秀子さんが來られる事になれば、どんな仕立でもこちらの注文通りになさつて、その上十萬圓のお金をお土産に持つて來るのですつて。」
「まあ　そんな事本當でせうか。」
「本當なのでございませう。
お嬢様が眞劍で話してゐらつしやいましたから……。
だから私餘りだと思つたので、飛込んで行つて、お嬢様にうんと言つて上げやうかと思つた位でした。」

「まあ　何を言ふのですお前は。
そんな亂暴な事が出來るものですか。」
「それでお母様や叔父様は、何と仰有つて見えましたの？」
「叔父様は初めの中は、秀子さんの事を、非常に惡く言つて、奥様の事を、日本一の嫁だと言つて、賞めてゐらして、容易にお取り合ひになりませんでしたけれど、お嬢様が、叔父さんがこの話に力を入れて、成功させて呉れたら、土産として秀子さんが持つて來るお金の中から、一萬圓現金で上げるつて言はれました。
すると叔父さんは急に氣が變つて、何事でも金が物言ふ世の中だから、それが本當なら、眞劍になつて働いてもいゝつて、お約束なさいましたの。
そしてこの家に、奥様が居られない様にするには、御隱居様があらゆる方法で、毒で飽かせ、針の蓆を敷いて、居堪らなくなつて、逃げ出す様に仕向ける外はないと言はれたのを、私ちやんと、この耳で聞きましたわ。」
「まあ　本當にそんな怖ろしいおたくらみがあるのでせうか。

それとも知らず私は、唯自分が行屆かないために、注意して下さるのだとばかり思つてゐたのにねえ。」
「だから奥様が、どんなに御隱居様に、親切にしてお上げになりましても、よくなさればなさる程、餘計逆に辛く當られるのでございますよ。
私もその話を聞いてから、こちらに御厄介になつてゐる事がすつかり厭になつて、貧しくとも平和な實家へ歸つて、兩親の肩でも揉んで上げ度いと思ひましたけれど、それでは奥様がお氣の毒だと思つて、今日迄辛抱してゐました。」
「有りがたう。本當にお前の眞心には、私感謝しますよ。
それにしても、そんな秘密を聞いて、何うして今迄默つてゐて呉れたの？」
「何度も申上げようと思ひましたけれど、餘り怖ろしい事ですので、申上げたらどんな事になるか知れないと思つて、今迄默つて居りました。
私はね　奥様、奥様に申上げると、どんな事になるか知れないから、一その事旦那様に申上げようかと思つて、よい時機はないかと、氣をつけてゐましたけれど、未

だに申上げる時がないのでございますよ。」
「まあ　飛んでもない。それこそ大變、そんな大切な事を、決して旦那様になんか申上げてはいけません。
そんな事をすると、親兄弟の間で、どんな事が起るか知れません。
まさかの事があつて、この家から私がお暇を頂いて行く様な事があつても、幾らでもさうした事は、世間に例のある事ですから、決して申上げてはいけません。
萬一世間に例のない様な間違ひでも起ると、家門に傷をつけ、世間の物笑ひになり、澤山の人が不幸になる事ですから、よく氣をつけて呉れなくちやいけません。
そして私にも少し考へがあるから、お前はあちらへ行つてゐてお呉れ。」

涙をのんで

智恵子はたけを去らしてから後で、ぢつと一人考へてゐましたが、軈て立上ると、

自分の箪笥の抽出しから、派手な外出着一揃、禮服に丸帶をつけて一揃、襟數十枚以上の物を取出して、積み重ね、財布から十圓札二枚出して、封筒に入れると、
「おたけ、おたけ。」
と呼びました。
「はい、奥様、何か御用でございますか。」
と言ひ乍ら、たけは急いで參りました。
「一寸中へ入つて戸を閉めて、坐つてお呉れ。」
「あら　奥様、どうなさいましたのでございますの？」
「實はお前にお話があるんですが……。私少し考へる事があつて、暫く母の所へ行き度いと思ふのよ。
その方が圓滿に解決が出來る様に思ふので……。
お前も永いことこゝにゐて、忠實に盡して呉れたのに、私がゐなくなれば、お前も淋しいだらうし先刻の様な事を、うつかりして旦那様のお耳にでも入れると、取返し

のつかぬ事になるから、御隠居様や旦那様の事は、私が何とでも取做すから、今すぐに實家へ歸つてお呉れでないか。」

たけは驚いて、「私に暇を出すからうちへ行けと仰有るのですか。」

「決してお前に落度がある譯ではないけれど、その方がどちらも都合がいゝと思ふから、頼みだから今日すぐに歸つてお呉れ。

又私がこの家へ歸つて來る事になれば、使を出して、屹度來て貰ふ事にするから。

そしてこれは皆私が、一度か二度手を通したものだけれど、まだ襟垢もついてはゐないから、お前に上げますから、着て頂戴。」

「まあ　奥様、飛んでもない。こんな結構な御衣裳を、私が頂くなんてそんなこと……。」

「お前はまだお嫁入り前で、これから衣裳がいるんだから、持つて行つて着てお呉れ。

それからこゝに二十圓お金があるの。

これ僅かだけれど、私の心付です。

急がせてすまないけれど、お勝手の事は私がやるから捨てゝおいて、ぢいやにも何とも言はずにお母様や旦那様がお歸りにならない中に、引取つてお呉れ。

それから今日の話の事も、先達立聞きしたといふ大切なお話の事も、人には勿論、おうちのお父さんやお母さんにも、決して話して下さるな。

これだけは私、真剣で頼んでおくから……。」

「言つて惡ければ、決して言ひませんけれど……。

今日急に在所へ歸らせて頂くなんて、何だか奥様をお殘しして、出て行くのが心配で悲しくて……。」

「お前の心持はよく分つてゐるんだけれど、今日だけは私が頼むから歸つてお呉れ。

決してこれが別れになるといふ譯ではなく、又來て貰へる時もあるんだから……。」

おたけは悲し氣に、

「ではどうでも私は、歸つて行かなければなりませんか。」

「お願ひだから歸つてお呉れ。

その方がお前の爲にもいゝんですよ。」
「それでは致し方がございませんから、歸らせて頂きますが、でも私何だか奥様の事が氣にかゝつてなりません。」
「まあ　私の事なんか、何故心配するのです。
何も心配する事はないのよ。安心して歸つてお呉れ。
さあ　少しも早くね。」
とせき立てゝ、荷物を纏めさせ、自分に與へた品物も、大風呂敷に包んで、俥を呼んで、たけも荷物も一緒に乘せ、
「ではたけ、體を大切にして、幸福にお暮し。
うちへ歸つたら、お父様やお母様に、よく〳〵孝行を盡すのですよ。」
たけは胸が一杯になつて、
「奥様お名殘り惜しうございます。
奥様こそ、どんな運命にも屹度お勝ちになつて、幸福にお暮し下さいませ。

私お別れしても、奥様のお仕合せを、神様佛様にお祈り致します。」
「有がたうよ。では御機嫌よくね。
俥屋さん、よろしくお願ひ致します。」
主從はお互に涙の中に別れました。
おたけは後髪引かれる思ひで、段々遠ざかつて行きます。
智恵子はぢつとその後姿を見送つてゐました。

ぢいやの心

智恵子はたけを急に歸らせて終ふと、深く何事か頷いて決心したらしく、急いで家の中へ引返しました。
そしてペンを執つて、便箋にさら〳〵と何事か認めると、手早く封筒に收めて、簞

筒の抽出しに入れ、取り散らしてある着物などはきちんと、疊んで納め、部屋を整頓すると、必要な物だけ取出して、トランクに詰め、裏の納屋迄そつと出して、身繕ひを調へると、お勝手へ來て、畑から今し方歸つて來た、彌助に向つて、

「おゝ　ぢいや　御苦勞でした、

えらかつたでせう。さあ休んでお呉れよ。」

「馴れた仕事ですから、えらいも何もございませんだ。

奥様、おたけはどうしましたか。」

「おたけはね、實家の父が急病だと言つて、使が來たものだから、すぐ行くがいゝつて歸しましたよ。」

「おや／＼、それはまあ大變だ。

いつから大病になりましたかなあ。おたけのお父さんは？」

「何でも急に惡くなつたらしいんですよ。委しい事は聞かなかつたけれど。」

「それやまあ　惡い事だ。早くよくなればいゝがなあ。

それで奥様、お勝手をして下さつたゞね。

御隱居様はうちだかね。」

「お母様は午少し過ぎに、御實家へお出でになつたやうですよ。」

「さうだか。この頃の御隱居様は、まるつきり花嫁の樣に、在所へ行く／＼と言つて、遊びに行かつしやるだのう。

奥様のお在所がなくなつたといふのに、まるで當てつけ見たいだ。

年甲斐もなく、在所だ／＼つてまるで御隱居様の氣が分らないだよ。」

「ぢいや、そんな事を言ふものじやないよ。

年が寄ると、誰でも實家が懷しく、肉身が戀しいものださうですよ。」

「どうだか知らんが、現在目に入れても痛くない程、可愛いゝ息子殿に貰つたお嫁樣に、朝から晩迄、叱言を言つて、虐めておいて、在所が戀しいもないもんだ。」

「ぢいや、そんな事はもう言はないで……。」

「だつて　奥様、大體奥様がよくないんだよ。

一期や半期、飯炊奉公に來たんじやあるまいし、歴とした總領の嫁御寮として目出度〳〵の若松様よで、祝ひ込んで見えたものを、理由もないのに、無茶苦茶に虐められて、私が悪いだの、行屆かぬだのと、詫びる一點張りでおとなしくして見えるものだから、餘計御隠居がつけ上つて、まるで奥様を、犬か猫の様な取扱ひをしやうとするんだ。

俺あ愚か者だけど、この家に先の旦那の見える頃から奉公して、二十年の餘も世話になつてゐるだが、御隠居は若い時から、根性はしつかりしてゐたゞが、今の様な分らずやじやなかつた。

此頃年が寄つて、ちつと老耄したゞかな。

俺ら一べん御隠居に、可愛いゝ息子に貰つた嫁を、無茶苦茶虐めるものじやねえと意見しやうかと思つてゐるんだが……。」

「ぢいや、頼むからそんな事は言はないで。

お母様がもうお歸りになる頃だから、聞えたら大變ですからね。」

「聞えたつていゝだよ。文句を言はつしやつたら、それをきつかけに、言い度いだけ言つてやるだ。」

「まあ　ぢいや、私が行屆かないからこそ、お母様が色々心配して、御注意下さるのにそんな風にお前達が誤解するのは勿體ない。

お前達がそんな事を言ふと、私の立場が困るじやないか。

お母様は天にも地にも、たつた一人の、旦那様のお母様だもの。

どうか決してそんな事は、これから先言はないでね。」

「奥様はどこまで心が美しいんだかなあ。

全く神様か觀音様の様な方だ。

それにしても奥様のうちは、人を助けたゝめに破産さつしやつて、兄様が遠い南米とやらへ行かつしやつて、お母様は親戚の家に厄介になつてお出でださうだが、何てお氣の毒な事だらう。

こちらはかうして、立派にやつて見えるのに、可愛いゝ一人娘の嫁いて見える家に

さへ、大手を振つて遊びにござらつしやらぬとは、お氣の毒でならぬ。
こちらの御隱居は、何も彼も事情を知つてゐて、せめて奥様のお母様だけは、來度い時だけは、自由に遊びに來て貰ふ様に、話をしたらよからうものを……。
兄様の仰有つた事を、いゝ事にして、來る人來る人に、奥様に當てつけがましい様な事を言はれる。
人様の大事な、可愛いゝ娘をお貰ひ申しておいて、何でその様に憎まねばならぬだ。
自分の子の好美様の事になりや、あんな手に負へぬ様な、出來損ひの我儘娘でも、目に入れても痛くない程可愛いゝじやないか。
そして旦那様が一寸注意さつしやつても、目の色迄變へて、まるで氣違ひの様になつて腹を立てる癖に、非の打ち所のない奥様ばかりを憎がるといふ事は、どうしても合點がいかぬだ。」
智惠子はもて餘して、
「ぢいや、お前達が私の事を可哀さうだと思つて、同情して呉れるのは嬉しいけれど、

それは却つて仇になるのだから、私のためを思つて呉れたら、何も言はないで下さいよ。お母様だつて、いつまでも今の様に、私を唯行屆かない、不出來だとばつかり思召して頂く譯でもなく、又時期が來れば、私の心持も分つて頂けるし、私だつてお母様のお氣心が、本當に分つて來ると、お氣に入る様に仕向ける事が、出來る様になるから、今當分の間は、見惡くとも聞き辛くとも辛抱して、他家の方などに、色々とうちの事などを話さない様にして下さいよ。
でもぢいやがしつかりしてゐて呉れるので、旦那様も色々と御用が多いけれど、うちの事はぢいやが引受けてゐて呉れるから、心配なく働けると仰有つて、いつも喜んでお出でになるのですよ。
だからこの後どんな事があつても、この家にゐて旦那様のお力になつて上げて下さいね。」
「それは奥様が仰有る迄もない。
俺あ寄邊もない身だから、置いてさえ下されば、一生置いて頂いて、飼殺しにして

貰ひ度いと思つてゐますよ。」
「本當にぢいやがゐて呉れるので、どんなに私達は心強いか知れません。
それに私は早く父を亡くしたので、ぢいやが餘り親切にして呉れるものだから、時々お父様の様な氣がして、懐しくさえ思ふのよ。」
彌助は頭をかいて、
「これはまあ　奥様、勿體ない事を仰有る。
こんな無學無智な老耄老爺を、お父様の様に思はれるなんて言はれると、俺あ本性から涙がこぼれるだ。
だがなあそんな事を聞くと、勿體ない事だが、奥様が餘りお優しいので、俺も一人こんな娘があつたら、どんなに嬉しからう樂しからうと思ふと、年寄の癖につまらねえ愚痴が出て、思はず涙がこぼれる事があるだよ。
廣い世の中にも、奥様の様な、心の優しいお嫁御は、二人とあるものじやねえだ。
その奥様が、見てゐられぬ程虐められて、毎日苦勞しなさるから、俺あ人知れず泣

いてるだよ。」

斷腸

その日幾代は、夕方になつても、遂に歸りませんでした。
たけも去つて淋しい夜なのに、智恵子は眞心こめて、夕食の支度をして、今か〳〵と夫の歸りを待つてゐると、敏郎が歸つて來ました。
「お歸りなさいませ、お疲れでございましたでせう。」
「あゝ　只今、お母さんは？
「お母様は、お午過ぎに、お實家へお出でになりまして、まだお歸りになりません。」
「又今日も平井へ行かれたのか。
それにしても、もう歸つて來られさうな頃だね。

何か用事でも出來て、使ひでも來たのかい。」
「いゝえ、そんな事はない樣でございましたけれど……。
あの　何とも仰有らないで、お出かけになりましたの。」
敏郎は不思議に思つて首を傾げ
「默つて行かれたつて？
變じやないか。それは？
又この頃よくお母さんは、實家へ行かれるんだね。」
「はい、何か御用事がお有りになるのでございませう。
あのそれから、たけのうちから、急にお父さんが大病だからつて、使が參りました
ので、お母樣や貴方のお許しを受けないで、歸らせてはいけないと存じましたけれど、
一足遲れて臨終の間に合はなかつたなんて事も、よく世間にございますのでと思ひま
して、お母樣や貴方には、私からよくお願ひして上げるからと言つて、歸らせました
が……。」

「あゝ　さうか。たけのお父さんが……。いつから惡いんだらう。」
「何でも急病で、とても重い樣な樣子でございました。」
「それだつたら、ちいやでも見にやらぬといけないだらう。」
「餘り惡い樣だつたら、すぐ知らせてお呉れつて、申してやりましたけど……。」
「さうか、それでは大變惡ければ知らせて寄越すだらうから、それからにすればいゝ
ね。」
とそれからゆつくりとお湯に入つて、茶の間へ來て、食膳に向ひました。
「今夜は莫迦に靜かだね。
ちいやもこちらへ來て一杯お飲み。」
「旦那樣　勿體なうございます。ではお言葉に甘へて、頂きますだよ。」
ちいやは入つて來て、敏郎から獻された杯を、嬉しさうに何度も頂いて、美味さ
うに飲むのでした。
「今夜の御馳走は非常においしいよ。」